

東北の 子どもたちに 希望を

3.11から2年たった今、その影響と変化

NPO法人キッズドア



2013年3月31日発行
発行／特定非営利活動法人キッズドア

〈東京〉
〒103-0016
住所：東京都中央区日本橋小網町1-5-304

〈東北〉
〒980-0804
住所：宮城県仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル7階 フラスコおおまち内

TEL：03-6231-1029 FAX：03-6862-6093
MAIL：info@kidsdoor.net
HP：http://www.kidsdoor.net/

【寄付の振込先】

三井住友銀行 小岩支店 普通 7051849
郵便振替 00120-4-743715 特定非営利活動法人キッズドア



この冊子は、オートレースの支援を受けて作成しました。

はじめに

東日本大震災から丸2年が経過しました。私どもキッズドアは、2011年4月11日より東北での子ども支援活動を継続しています。子どもたちと向き合いながら学習支援や、体験活動、また学童保育などをお手伝いさせていただいています。

私たちは「震災によって夢や希望をあきらめる子どもを一人も出さない」をモットーに、微力ながら日々、精一杯活動を行っています。現地の多くの方々に献身的なご協力をいただき、皆様にご無理をお願いしている部分もあります。それもこれも、「被災した子どもたちの支援は、まだまだ継続的に必要であり、保護者も先生も大変疲弊していらつしやる。今こそ、NPOを始めとした外からの支援が必要な時期だ」と感じているからです。

一方、活動をしていて、子どもたちへの支援の重要性をなかなか伝え切れないという忸怩たる想いがあります。テレビや新聞では、被災体験を前向きに捉え、明るく頑張っている子どもたちの姿が取り上げられますが、そうではない子どもたちもたくさんいます。なかなか進まない復興に疲れ果てている保護者や、経済的な困難に直面しているご家庭も多く目にします。

震災後3年を迎えるにあたり、子どもたちの本当の様子はどうか、子どもたちを取り巻く保護者や先生はどんな状況にあるのか、一度きちんと捉えたいという想いから、この調査を企画いたしました。

調査にご協力いただく事さえ難しい状況の方が多い中、私たちが集められたのは数少ないサンプルですが、その中に、子どもたちの、ま

た保護者の生の声がありました。

津波でご主人と両親をなくし、震災当時妊娠していらつしやつたというシングルマザーは、小5、小2、1歳のお子さんを、一人で育てて行かなければなりません。「自分がしつかりしなければ」という想いと裏腹に、行動に移せないお母様へは、どのようなサポートが必要でしょうか？震災直後、学習支援を受けて進学した高校生は、「復興のために自分も役に立ちたい」という熱い気持ちと同時に、あまりにも進まない復興にいらだち、「復興の前に復旧、とにかく震災前に戻って欲しい」という想いを語ってくれました。私たちの学習支援に通ってくださった保護者の中には「下の子のときにはこのような支援がなくなってしまうのか」という不安をお知らせくださいました。被害が大きかった岩手県立高田高校の1、2年生に実施したアンケートからは、支援に感謝するとともに、今後の進学に対する不安、また経済的な支援の必要性が、明確に浮かび上がりました。仮設住宅では、勉強することが難しい、学習時間が減っているなどの実態もわかりました。困っている子どもたちに、保護者に、どのような支援が必要なのか、その糸口を掴む事ができました。

この調査が、多くの方々に「東日本大震災で被災した子どもたちへの継続的な支援」を、もう一度考えていただくきっかけになり、そこから、震災後3年目、4年目、5年目という長期の支援を形作る一助になれば幸いです。

特定非営利活動法人キッズドア
理事長 渡辺由美子

〔目次〕

はじめに 渡辺由美子	2
子どもたちの希望を叶えられる環境をめざして 岩手県盛岡市 浅井慶子さん(仮名)	4
被災による収入減。助成制度でやりくり 宮城県岩沼市 河合由美さん・彩香さん(仮名)	11
母子を支援しながら、支援の輪をつなげる 岩手県盛岡市 山屋理恵さん	13
私たち、子どもの意見を復興に取り入れて欲しい 岩手県山田町と宮城県南三陸町の高校生	16
同じ被災者として生徒に寄り添う 岩手県陸前高田市 伊勢勤子さん	19
東日本大震災による変化と影響についてのアンケート 岩手県立高田高等学校 1年生・2年生の回答	28
チャンスや支援の多い東京で頑張る 東京都 本田サラさん(仮名)	34
東京へ母子避難、納得のいく暮らしを求めて岡山へ 東京都 菅野久美子さん	38
自分の意志に向きあい東京から福島に戻る 東京都 軒澤沙織さん	43
それぞれの避難状況にあわせた支援を 新潟市 村上岳志さん	49
東日本大震災による子どもの学習環境の変化とその影響についてのアンケート 一般の回答	54
おわりに 岡本美架	58

インタビュー構成文：岡本美架
デザイン：東京〇〇ミリアールスタジオ

【インタビュー】

子どもたちの希望を叶えられる環境をめざして

岩手県盛岡市 浅井慶子さん(仮名)

盛岡への避難

浅井慶子さんは、被災当時、釜石市内の子ども教室で仕事をしていました。沿岸から2〜3km離れているため津波の被害はなかったが、子どもたちや家族がどうなったか心配だった。

「小学3年生の長女の通う学校は、避難所に指定されていたけれど、学

校のすぐ下まで津波がきたので、それより上へ上へと先生が避難させてくれて無事でした。

次女の幼稚園は、海からは離れている幼稚園でしたが、津波がきたので、先生や周りの人たちが、山に連れて逃げてくれました。辿り着いたのは、ギリギリ津波が届かない場所で、小さい子どもたちであちこち逃げ回ったと聞いています。その時点で

幼稚園のお友達は、みんな無事でしたが、一旦、帰宅した子のなかで亡くなった子もいたそうです。」

道路が寸断されたため、仕事先から帰る道がわからず、避難所になっている長女の学校で長女と会ったのは翌日の12日の夜遅く。会えたときは靴を履いたまま抱き合って泣いた。そこで次女が通う幼稚園の子どもたちが避難している場所を聞き、13日の朝に車で迎えに行った。

「主人の仕事場が海のそばだったので、お友達に子どもを預け、歩いて探したんですが、主人の会社のほうに車で走っている途中で、主人の同僚の方に会い、そこで主人が亡くなったことを聞きました。私の両親は、長女の学校の避難所にいるはずなので、いろんな人に聞いて回ったのですが、見つかりませんでした。」自宅も流されていた。

その避難所には約300人ほどの避難者がいた。慶子さんは第3子を妊娠中だったため、周りの人が気を遣ってくれ、避難所の校長先生の家に移り、13日の夜はそこで過ごさせ

てもらった。14日、盛岡市内の停電が復帰し、盛岡の姉に電話が通じ、役場の人が連絡をとった。その避難所には妊婦が1人しかおらず、子どもも小さいため、役場の人の車で、盛岡に連れてきてもらった。盛岡の家は停電や断水もすぐ復帰し、家は問題なかった。

盛岡と沿岸の往復

それから沿岸部への遺体探しで往復が始まった。夫の遺体は12日に見つかったが、両親はまだ見つかっていなかった。ガソリンがなく、数日に一度しか戻れない。何時間並んでも、ガソリンを入れられなかった日もあった。数リッター調達できたから戻るといっことを繰り返した。

「身重で体力的にきつかったけれど、行かないと会えない。会いたい一心で、時間とガソリンがあれば行っていました。親戚と長女と一緒にでしたが、長女には、お父さんが亡くなったことは言ってませんでした。避難所を全部見た後は安置所だ

けなので、長女を連れていても、気付かないように気を使っていました。でも、子どもはどう思っていたかわかりません。」

父は現在も見つかっていない。母は、取り違えがあり、夫と同じ安置所にいたはずだが、別の家族のお墓に1年間入っていた。後日DNA鑑定で判明し戻ってきた。

「時間はかかったけれど、帰ってきたくれたので、良かったです。子どもたちにとっては、近くにいた人がみんないなくなってしまうって…本当にかわいそうです。」

盛岡と地元の往復は、8月頃まで続いた。「私は、実家の近くの学校に通い、そこで生まれ育ったため、町を出るのは初めてでした。ひとりで全部やらないといけないのは、かなりきつかった。盛岡の実姉は、両親を亡くしたというのは同じ立場。随分気持ちの支えになってもらえました。ただ、姉にも家庭がありますし、今までの暮らし方もそれぞれ違うので、ずっとお世話になるわけにはいきま

せん。姉とはつかず離れず、いい距離感を保ちながら、迷惑をかけないようにしたいと思います。」

盛岡では、住民票が定まらないと、学校の手続きができないため、姉の家から出て、被災者用のアパートに移った。

やり場のない気持ち

子どもたちは、4月末から盛岡の学校に通い始めた。小学校1年に上がる次女は、卒園式も入学式もなかった。

「この学校に沿岸から被災してきた子は、全校で10人くらいいると聞いています。前の学校は、全校で70〜80人くらいの小さい学校でしたが、この学校は、1学年に2〜3クラス。転校自体は初めてでしたが、すぐにお友達はできました。」

次女は、4月末に1ヶ月遅れての小1スタートだったため、勉強についていくことができず、周りの環境に慣れるのに少し時間がかかりました。でも、今は大丈夫。いいお友達

ばかりで本当に良かったです」。

転入時、次女の担任は被災地からの転校生も平等にみてくれる先生で、長女の担任には慶子さん自身も支えてもらえ、本当にいい先生に出会えて感謝している。

子どもたちは、お友達もたくさんでき、新しい学校にも慣れ、どんどん進んでいるように見えるが、心の中まではわからないと慶さんは心配する。

「自分の気持ちのやり場がなく、浮き沈みが激しくて、子どもたちに当たってしまう。それでも子どもたちは黙って聴いてくれていたんです。特に、震災直後はひどかったです。今でもつい出てしまうので……かわいそう……と思いつながら、何もできない。私が何も声をかけてあげられないんです」。

特に上の子は、心配です。私が「パパは、こうだったね」とか、震災のニュースを探して見ってしまうんです。最近、長女が『そういう話、しないで』とポロツと口をつたんで。『あ、そうだったのか……』と固まっ

地元には戻らない

慶子さんが盛岡にきてから、沿岸部で被災経験のある新たな友達はできていない。友人知人は地元に残ったままだ。時々電話はするが、お互いの状況がある程度わかっているものの、詳しい状況を知らないため、突っ込んだ話はできない。被災を経験した者同士の暗黙の了解がある。

「私は戻りません。誰かひとりでも生きてくれたら、離れなかったと思うのですが、両親も主人も亡くなったのが大きい。甘えているかもしれないのですが、頼りにできる人がひとりもいなくなったところにはいられません」。

大人は自分の住む場所を自分で決断できるが、子どもたちは親についていくしかない。その心への影響は計り知れない。

「地元で親が亡くなった子は少ないんです。同じクラスでも1人くらい。全校で70〜80人の学校で、1学年に1人か2人しかいません。地元に残っていても、仲の良かったお友

達は家族がみんな大丈夫なので、そのなかでは、そんな話はできないし。地元の子同士でも、親を亡くした子どもたちの環境のなかでしか、話ができないでしょうね」。

それに、家においても、私が聞いてあげることができないんです。あの子たちの不安や気持ちとどうやって向き合ったらいいか……。ちゃんとしたお母さんであれば、きちんと子どもを見て、甘えさせてあげて、しっかり抱きしめてあげることができると思っていますよ。でも、私はできなかった……」。

母親として子どもに対してすべきことは頭ではわかっていますが、なかなか行動に移せないのは、普通の暮らしでも頻繁にあることだが、大きな被災の後では、なおさらのことである。

褒められない、抱きしめられない

次女は小さいなりに、片付けができてきたり、なんでもきちんとするタイ

てしまった。それでも私はどうしても話してしまうので、長女は黙って私の話を受け止めてくれて、長女は、我慢して我慢して、私の支えになってくれている。まだ9歳なのに。私を支えないといけない状況になってしまったことが本当にかわいそう……」。

慶子さんは、子どもを大人扱いしてしまった自分、母として子どもの気持ちに寄り添えない自分に罪悪感を抱いていた。

2011年6月に三女が生まれた。子どもたちにとっても慶子さんにとっても明るい転機だった。

「この子が生まれたとき、みんなでものごく喜んだんです。家族が増えたんだよ、ということが、子どもたちにとつてうれしかったんだと思います。姉妹は、今、とても仲が良いです。震災直後よりは、少し子どもの状態に戻ったかな。この子が生まれなかったら、私、気持ちのバランスがとれないままだったんじゃないかな。たぶん、崩れていたと思います」。

プだったが、被災後は全くできなくなっていた。以前できていたことが、途中でできなくなるのではなく、最初からやらなくなってしまうのだ。

「すべてにおいて、だらしなくなっただ感じ。でも、意外にそれが本来の1年生の姿なのかもしれないと思ったりもするんです。今までパパと一緒にやって褒めてもらって、どんな次のことでもできるようになっていたのが、普通以下になってしまった。パパがいなくなつてそうだったのかなあと。つまり、私が代わりになれなかったという事なんです」。

父親がいなくなつたショックからの行動かもしれないと感じながらも、慶子さんはそれを見ると、「ちゃんとやって」と怒ることしかできない。三女に手がかり、上の2人に目が届かず、断片的に目に止まって気になつたところだけを怒つてばかり。

「かわいそうだなと思いつつ、自分の気持ちが不安定であたつてしまっていることだと気づいても、褒めてあげ

ることができなくなつてしまつて。以前は『えらいね〜』と言っていたのに、なぜかできなくなつてしまつたんです」。

自分に余裕がないから、子どもたちをよく見てあげられない。自分でもわかっていても、できない。今もその状態が続く。

「子どもたちからすれば、わかっていっているのに、じゃあ、なんでやらない? ってなりますよね。自覚があるのにできないなんて、ひどい親です。小5と小2、まだ甘えたい時期なのに、私が勝手に大人にしてしまった。だから最近、上の2人を抱きしめることができないんです。できなくなつてしまつた。どうしてできないか、自分でもわからない。前はかわいくて抱きしめてあげられたのに。今でもかわいいんですが、できないんです……」。

支援の継続を

盛岡の復興支援センターは、さまざまな被災者支援が集約されてお

り、被災者がいくと自分にあつた支援を受けられるだけでなく、被災者同士の交流もでき、沿岸部からも多くの人が訪れている。母向けのプログラムもあるが、慶子さんは三女が小さいため、なかなか参加できない。いずれ、お茶会や復興ぞうきんづくりなど、参加してみたいと考えている。

子どもたち向けには、県内のNPOが無料で学習支援を行なっている。子どもたちも、一昨年12月から参加し始めた。「県内の大学生が勉強を教えてくれるので、遅れている勉強を取り戻すのに、とても助かりました。それに沿岸部からきたお友達にも会えるので、週1回通っています」。

また、子どもたちはスイミングスクールにも通っている。慶子さんは、震災前、子どもの音楽教室で働いていたので、長女をピアノに通わせていた。「本人より、どちらかという私が習わせたかったんです。盛岡には、いろいろお稽古事はあるので、通わせてあげたいという気持ちはあ

るんですが、今は経済的な余裕もないので」。

現在は、義援金や遺族年金、労災などを受給して生活している。また、NPO法人インクルいわての中間就業支援プログラムに参加し、週に1日、仕事をする生活に慣れると共に、事務やパソコンの訓練などを受けている。

「インクルいわてにきて、話をしたり相談のつてもらったりして少し元気になってきました。早く仕事を見つけてちゃんと働かなければ、と思っただけですが、まだ気持ちが……。甘えているだけでしょね……。いつまでも思い出しにひたつてちゃいけないって、わかってはいるんですが……」。

被災者が元の生活に立て直すまで、仕事、子育て、住宅、精神面など、様々な支援が必要だ。すでに行政からの支援はあてにできないため、民間のいろいろな支援がいつまで続くか不安だと感じている。

「今までも支援を頂いていて、これ以上欲しいなんていうのは、ワガマ

マなんじゃないかと思ってしまうんです。被災者だからといって何を要求してもいいというわけではないと思うので、その線引きが難しい。震災から2年たち、被災者ではない方から見れば、被災者が支援を少しでも長く続けてほしいというのは、凶々しいと映るのではないかと。

ただ、子どもたちへの支援は、子どもたちの心が元気になるまで、続けて欲しいですね。そういう場所があるということだけでも、私たちがうれい」。

復興への思い

昨年の12月1日、三回忌のために地元に戻った。慶子さんが住んでいた家は、現在は土台だけ。そのあたりは、新たに建てられるわけではなく、何もない状態。高台に仮設住宅があるが、それ以上の高台がないので、仮設に住む人たちの家を新たに建てる場所がない。民間の支援はたくさんあるが、行政による復興は全く進んでいないように見えない。

「国、県、市町村、たくさんやることがあるんですが、なにが原因で決まらないのが、全くわからない。地元の間は無視されたまま、時間だけが過ぎていくので、そのモヤモヤだけが残る。昨年末の選挙では、立候補者が被災地支援や復興という言葉をよく利用して、自分だけがのしあがるうとしてるようにしか見えなかった。本気できちんと考えている人はいないんだろうな。何も決まらなないと動けないので、先の道筋すら考えられず、見捨てられている感じです。一体、いつ……という、怒りみたいな気持ちがあります」。

復興が進まない現状が、被災者の心のダメージを何倍にも大きくし、回復を遅らせているのは間違いない。

母として、親として

慶子さんの今後の目標は、「子どもたちの希望が叶えられるよう、応援できる環境にすること」である。

「子どもたちには、さんざん我慢さ

せ、可哀想な思いをいっぱいさせてしまった。これから、自分が希望する道があるなら、その通り進ませてやりたい。まだ小学生ですが、中学、高校に進み、自分がこうなりたいというのを見つけて、それを伝えてくれればいい。それを私が、受け止められるような状況にならないとダメだと思っています。父親がいなければ、本人の希望の道にいかせてあげられないというのは、絶対にしたくない。簡単ではないですが」。

大人より、子どもへの気持ちの負担が大きかったはずだと感じながら、今、自分が親として受け止めてあげられないことへの申し訳なさや、将来の希望を叶えさせたいという強い決意につながる。しかし、「一番頼りになる人がいなくなってしまうって、私ひとりです3人の子育てしながらの生活で、そのときに、それがちゃんとできるのか。被災しても家族がいる方と、家族が亡くなってしまうのと一緒にされるのは、ちよつと……。主人がいれば、どんな困難なことでも、一緒に頑張れる

んですけど……」と不安も募る。

また、現時点で中高大学生の支援があるのを知り、自分の子どもたちが成長した頃にも続いているか不安になる。母として、親として、子どもたちが自分らしく進むことを応援し、阻むものはなくしたいという熱い思いがあるのに、現時点では素直に言葉にも行動にもできない自分への苛立ち。その想いを少しずつ時間がかかるとはれないが伝える努力をしていきたい、と静かに微笑む慶子さんが、最後につぶやいた。「パパは子煩悩な人でした。子どもたちは、お父さんとしたいことがまだまだあったのに……主人が生きていて、私がいなくなったら良かったのに……」。

家族を失った傷は大きく、簡単に癒えるものではない。親子が素直に気持ちがあわせるようになると、一体どれくらい時間がかかるのだろう。ゆつくりでも少しずつ回復し、普通の生活に戻るためには、どんな小さな支援でも継続は欠かせない。

【インタビュー】

被災による収入減。 助成制度で やりくり

宮城県岩沼市 河合由美さん・彩香さん(仮名)

職場の小学校が被災

由美さんは、3・11当時、宮城県亶理郡の小学校の職場にいた。
「津波がくるということで、全員で校舎の上に逃げ、その日は校舎の屋根裏部屋で一晩過ごしました。翌朝、通りがかった自衛隊のヘリコプターで、生徒も教員も全員救助されました。」

た。

小学校は、壊滅的な被害を受け、近くの小学校に一時的に合流させてもらい再開した。
「うちの小学校の生徒さんのお住まいは、みんな流されました。お母さんが亡くなった方、祖父母が亡くなった方もいます。半分以上が地元を離れて、親戚を頼るなどして移り、

残ったのは30名くらいですね。うちの学校は小規模校で全校生徒は60人弱、1学年が10人くらいなので、近くの小学校の同じ学年に混ぜてもらい、ひとつの教室で一緒に授業をしました」。2013年度から被災した小学校は統合され、なくなる予定だ。

宮城県岩沼市の由美さんの自宅は、地震による大きな被害はなかった。「車で5分くらいのところは学校自体が浸水してしまい、自宅が流された方も亡くなった方もいるので、引越したり仮設住宅に住んでいる人はいます。仙台空港は閉鎖になり、近辺の工場も全部ダメになり、車も全部流されて、空港関係やその近辺で働いていた人は仕事を失った方が多かったです」。

同級生と 震災の話題はタブー

当時中学2年生だった娘の彩香さんの中学校は特に影響はなく、周りにもひどい被災を受けた人はいな

かった。

「震災直後は、お風呂に入れないとか、メールが通じると『この人知りませんか?』というメールが友達からきたりはしました。震災後1週間くらいは友達と一緒に、高齢者に水や物資を配るボランティアをしました。中学時代のみんなは無事でしたが、高校になると広いエリアから通ってきているので、屋上まで逃げたとか体育館が水浸しになったという子はたくさんいます。みんなトラウマになってるので、友達とは震災について話せない、聞けない。その話題はタブーです」と彩香さんは話す。

彩香さんの周囲では、余震がくる、それまでおしゃべりしていてもシーンと真面目になり、敏感に反応する。「昨年の大きめの地震のとき塾にいたのですが、先生が机の下に隠れる、といった途端、みんなの頭が一瞬で視界から消えました」。

現在高校1年生の彩香さんは、学校の授業内容について「基本的な知識は教わっていますが、勉強の進み

具合として、絶対省略しただろうというところはありませんね。高校に入って一定期間勉強ができる雰囲気ではなかった。夏を過ぎてくくらいからやっと落ち着きましたね。震災中

まともに勉強している人はいないと思う。できる状況ではなかったです。ただ、勉強に関しては、みんな同じ条件なので、特に困るほどではありません」。

高校受験のために塾に通うのは一般的で、震災後、さまざまな塾が被災者に対し無料や割引の制度を打ち出したため、それを利用して受験に備えたのだという。

彩香さんは、キッズドアの『ガチゼミ』『タダゼミ』に参加してきた。「キッズドアの学習支援は本当に助かりました。塾や学校のように大人数ではなく、マンツーマンで見られるのが、とても良かった。高校になってからも行っていますが、大学生や海外で働いている社会人の方たちが勉強を教えてくれるだけでなく、大学進学や仕事についての話もしてくれるので、将来の進路を考え

るときに参考になります」。

助成制度をうまく利用

由美さんはひとり親家庭で、学校の臨時職員として事務の仕事をしている。津波で元の職場だった小学校が使えなくなったため、別の中学校が新たな職場となったが、仕事量は同じなのに収入は半減してしまっ

た。被災による収入減に対して、県教育委員会からの被災生徒育英奨学資金で子ども1人につき月2万円の助成がある。民間の助成制度はいくつかあるが申請しても必ずしもおけるとは限らない。
「学校の事務で毎日文書収集をしているので、常にさまざまな支援の情報を得やすい立場にいます。学校によつては情報を全員に配布するところ、該当者だけに担任が知らせるところ、掲示板に貼っているだけのところと対応はバラバラ。生徒が気がつかなければ、制度があっても利用できません。うちは家計が大変なので、こういった制度をうまく利用し

て、子どもたちに機会を作ってあげたい。子どもたちにも学校の掲示板は、ちゃんと見ていてねと話しています」。

彩香さんの姉の愛さんは、奨学金関係でホテルでの職場体験プログラムに参加した。石巻、福島、岩手からの中高生が8人くらい参加していた。由美さんは、「最初、行きたくないといっていたのですが、将来、英語関係に進みたいという娘に、ホテルでなら国際的な体験ができるかもしれないと薦めました。有意義なプログラムだったようで、戻ってきて『どんな子たちが参加してた？』と家族が亡くなった人もいたの？」と聞いたら、「そんなこと聞けるわけ

がない』と言われました。被災体験についてはお互いに話せなかったようです」。

愛さんは、高校にアルバイトの許可申請をしたところ、申請者は学校全体で2人目だった。

「アルバイトについては、成績がある一定以上で学校の許可をとればできるのですが、この高校は進学校のためアルバイトをしている子はほとんどいないんです。申請を出さないとやっている子もいるのかもしれないが……。うちの場合は、経済的に厳しいため認めてもらわないと困るので、やっと許可してもらいました。ただ、卒業までの許可申請を出しましたが、1年間のみしか許可さ

れませんでした」。

愛さんも彩香さんも、将来は英語関係の職業に就くのが夢で、大学はその分野を勉強できる国公立をめざしている。「子どもたちが経済的なことを気にして、やりたいことができない、行きたいところに行けないというようにはしたくないんです」と由美さんは語る。

今でも小学生のように学校であったことは、なんでも話すという仲の良い母娘。一生懸命頑張る子どもたちの努力が実るような、将来の夢をサポートする支援がさらに充実していったほしい。

【インタビュー】

母子を

支援しながら、 支援の輪をつなげる

岩手県盛岡市 特定非営利活動法人インクルいわて 理事長
「よりそいホットライン」中央盛岡責任者・東北コーディネーター
山屋理恵さん

山屋さんは、インクルいわてを立ち上げる前、盛岡市の非常勤職員として8年間、多重債務や契約トラブルなどの相談窓口を担当してきた。

「病気や障害、生活困窮や虐待などがあった、問題を抱えてしまう人の多さ、問題があっても声あげられない人たちを身近に見てきました。特に、岩手は、〈我慢が美德〉とされ、

女は我慢して当たり前、殴られても

我慢という意識が男性だけでなく高齢の女性にも根強い。我慢して殴られる母親を見て育っている子も少なくありません。離婚すると、女性だけが悪者扱いされ、シングルマザーにとっては、生きづらい風土があります」。

子どもと母親を 同時に支援

震災後、山屋さんが被災地支援をするなかで、「今まで、借金やDVなど女性からの相談が多かったのに、震災後、生活に困っているはずのシングルマザーやDVで隠れている人たちが見えてこない。これは、被災したことで声をあげられない何かがあるのではないか」と考え、弁護士、助産師、女性センター、保育士、教師、女性支援、生活困窮者支援、障害児支援などのメンバーで、インクルいわてを立ち上げた。インクルいわての「インクル」とは「inclusion=包摂」の意味で、生活支援・収入支援・子育て支援を三本柱に、ひとり親の支援を行なっている。離婚やDV、被災からの生活の立て直しや就労までのサポートを行う「中間就労」、交流とピアカウンセリングを行う月1回の「シングルマザーズ・カフェ」、ひとり親の子どもたちのための定期イベント「おひさまクラブ」の他、シンポジウム

や支援者養成講座を行い、支援の輪を広げている。

現在行っている中間就労支援では、震災やDVによって外に出ることが怖いといったすぐに仕事ができる状態ではない母親たちに「インクルーム」に通ってもらい、就労にたどりつく前段階までをエンパワメントしている。

「私達の支援は生活の安定・就労が終着点ですが、震災で家族を亡くした人や虐待やDVにあった人に、いきなり仕事を紹介して仕事を始めたとしても続けることは難しい。そういう人たちにとって、朝同じ時間に起きて子どもに食事をさせ託児所に預けて出勤するまでが大変な仕事。まずその練習からです。人を信じて周囲との人間関係を築きながら、体調を整え心身の状態を回復させ、落ち着いて毎日を送れる状態になるまでかなり時間がかかります。人は一人では生きていけないし、子育てもひとりではできません。お母さんが安定しないと、子どもたちも健全に成長することはできません」。

山屋さんには、「母と子は写し鏡。子どもだけ支援しても、母親が元気で安定しないと、子どもに影響が出てくる。母子を同時に支援することが大切だ」という信念がある。

よりそいホットラインに入る本音

社会的包摂サポートセンターの『よりそいホットライン』は、2011年10月から被災地で始まった国の事業で、被災、仕事、お金、法律、職場、住居、DV・性暴力などあらゆる悩みを受け付ける24時間受付の電話相談を行なっている。2012年3月からは全国に広がり、毎日4万件ものアクセスがある。山屋さんは、『よりそいホットライン』の東北6県をまとめるコーディネーターも担当している。

よりそいホットラインには、被災地の電話が最優先して入るが、被災地のお母さんからは、子どものPTSDについての相談がよくかかってくるという。

「子どもが、急にガタガタ震え出したり泣き出したり、大きな余震があると、子どもがガンガン泣いて、『どうしよう』とオロオロして電話がかかってきたり。また、子どものPTSDの症状がいつ出るか、不安でしょうがないといった相談もあります。お子さんのPTSDを心配して病院にいったら、お母さん自身がPTSDだと診断されたという方もいます。被災直後は、死体の間を平気で歩いていただけで、今、改めてその状況を思い出し、急に怖くなったという方もいらっしゃいました。」

津波被害の地域の方は、外から見たら元気そうに見えても、みなさん同様に精神的には大きなダメージを受けてPTSDになっています。震災から2年がたちますが、誰もそれに触れない、言わずに外に出さない分、逆に悪化させています」。

最近よりそいホットラインにかかってきた高校生からの相談には、こんなものもあった。

「あんなにひどいことがあったのに、みんなが何も無かったことよ

うに笑っている。不思議だ。みんなが笑っているから、自分がおかしいのかと思ってしまう……という内容でした。つらいことを思い出さくないという意識で我慢して話さないから、お互いにおかしいと思ってしまうっている。思春期の多感なときに、そういう人たちを見て疑問を持ったり、気持ちのやり場がなくなったり、吐き出すところがなければ、人間不信になってしまう子どもも少なくないのではと心配しています。実際に最近、子どもたちの間でいじめが増えていきます」。

よりそいホットラインが始まって1年がたとうとする現在、電話相談でかかってくる言葉は、沖縄から北海道まで全国共通していると山屋さんはいう。

「電話をかけてきて最初に、場所を

いわない人が多いのですが、話の細を聞いていくと、被災地の人だということがわかる場合もあります。

でも、出てくる言葉は、全国みんな同じで、つらい・悲しい・苦しい・死にたい。被災した傷は、被災特有のことだけれど、それを通りすぎると、いきつくところは同じ。周りにあわせているけれど、心を開けないし、信じる事ができません。子どもも大人も孤立感を抱いています。ただ、震災で否が応でも支援が必要になり、行政の人も入らざるをえなくなり、他の地域の支援者が入ってきたのは、逆にいいことだと思うと山屋さんはいう。

「岩手独特の閉鎖意識が強く、凝り固まった考え方ではなく、いろいろな人に助けてもらったり、いろいろな種類の人がいて、様々な事やいろいろ

るな価値観があることを知るの良かったと思います。沿岸部の子どもたちは今まで大学生などほとんど触れる機会がありませんでしたが、支援できてくれた大学生に会い、様々な情報に触れ、将来の可能性についていろいろ考えることは、子どもたちにとってもよいことだと思います」。

山屋さんは、地震で地面が割れたように、いろいろな人が支援に入れるようになった状態を閉じてしまわないように、このつながりを大事にしながら支援を継続していきたい、また外部の支援とつなげていきたいと語ってくれた。

◆特定非営利活動法人

インクルいわて

<http://includiwate.blog.fc2.com/>

私たち、子どもたちの意見を復興に取り入れて欲しい

岩手県山田町と宮城県南三陸町の高校生

東日本大震災子ども支援ネットワーク
シンポジウム「子どもたちと一緒に考える被災地の復興支援の今後」から

宮城県南三陸町戸倉中学校を卒業した高校1年生4名が、被災後から今までの報告と子どもたちの立場から復興・復旧や支援に対する意見を発信した。

安定した学習環境の継続を

岩手県山田町は、津波と火事によって被災し、遺体も見つけられないうほど、甚大な被害を受けた。町の再生を願い、被災による学力低下を心配した地元の学習塾の講師や地域で文化活動をしていた人たちと特定非営利活動法人こども福祉研究所が、その町内に10年余り使われておらず焼け残っていた空き店舗を借りることから始まった。国際ゾントクの資金援助を受けて始まったゾントハウスは、東洋大学学生たちの協力を得て改装し、子どもたちのための軽食付き自習室として2011年9月4日に開所した。その一角は、町の子どもやおとなが交流する街かどギャラリーとして活動している。

1月13日（日）、東洋大学にて東日本大震災子ども支援ネットワーク「子どもたちと一緒に考える被災地の復興支援の今後」が開催された。会場には、100名以上の参加者が集まるなか、岩手県山田町ゾントハウスを利用した高校1年生6名と、

山田町ゾントハウスの「おらーほ」は、育ち盛りの子どもたちにとって空腹を満たすことが重要ということでトーストや調理パン、うどんなどの軽食と飲み物を準備。自習だけでなく、軽食を取りながら子どもも相互や子どもと支援者が交流する居場所スペースが重要になっている。今では約250人の中高生が登録し、常に30〜50人の中高生が勉強する場となった。

この日参加した高校生にゾントハウスの良かった点を聞くと、安定して勉強できる環境が一番にあげた。「軽食は、一番大事。空腹だと勉強できないし、30分〜1時間かけて遠方から通う人もいるので、軽食があるおかげでいつも安心して通うことができました」。その他、エアコンが完備され、文房具もあることで安定した環境で学習できたという声や、「田舎なので本屋がなく参考書を手に入れるのに宮古までいかないといいない。ゾントハウスには寄付による参考書などの教材が充実しているので、定期テストだけでなく、実力

テスト、模試のための自習ができるようになった」という子もいた。また、「学校ではなかなか他のクラスの人と話せないが、ここだと他のクラスの人と会えたのが良かった。勉強する雰囲気があるので、学校では話せない進路や勉強について話すこともありました」「違う学年とつながりができて、下の学年の子に勉強を教えたり、学校の様子や町のことなど情報交換できました」など子ども同士の交流も増えた。その結果、ここに通うことで成績が上がったことを実感しており、「ここがなければ高校に行けなかったかもしれない。ゾントのおかげで高校に入学できました」「できれば、大学に行きたい！」と意欲を高めた様子が見られた。

また、東洋大学の学生が継続的に支援に入ることで、「勉強だけでなく将来の進路を考えるための参考になった」という声が多かった。大人ではなく、中学生に近い年齢の大学生たちが、大学の志望理由や大学生活、東京の様子や将来について語る

ことは、被災した山田町の子どもたちに新たな目標や希望の芽を育んだようだ。

ゾントハウスの存在は、学習だけでなく、子どもたちの心を支えた様子もうかがえる。「ゾントにくると中3の時の初心に戻る。ちゃんとやろうという気持ちになれる」「時々ここに来て、後輩に勉強を教えたい」「ゾントハウスは、復興での大事なつながり、将来のために自分を高める場所」「支援して下さった人たちを忘れない。できるだけ長く継続して欲しい」と感謝と継続を願っていた。

復興より、復旧を

南三陸町の戸倉中学校は、津波被害により使用できなくなり、登米市の廃校だった善王寺小学校の校舎を借りて、戸倉小学校・中学校が再開された。バスで1時間以上かかる通学のなかで、中学生の部活終了後から戸倉に戻るバス発車までの約1時間、キッズドアが放課後学習会を行

なってきた。学校再開が1ヶ月遅れたうえ、外部からの支援イベントなどが入り学習が思うように進まず、勉強しづらい状況が続いたが、放課後学習会の成果もあり、2011年度の高校入試では全員合格できたという報告の後、戸倉中学校卒の高校生4名が、被災についての意見を發表した。

「避難所から仮設住宅に移ったときは、やっと家族単位でリラククスできる生活ができるんだとワクワクしたが、慣れてくると仮設住宅の狭さや隣の部屋の音にイライラする」「震災前、都会に住みたいと思っていたが、故郷の良さや以前の生活がどれほど贅沢かを実感しました。今は前の暮らしに戻りたい」と今の気持ちを紹介した。

また、支援について、「大きな避難所に物資が偏り、小さい避難所やライフラインが途切れて孤立した家に物資が行き渡らなかった。物資が偏らないようにしてほしい」「仮設住宅には物資は足りていません。これ

からは、モノを与える支援から、被災地に訪れて被災地のモノを買う支援に切り替えて欲しい」とこれからの支援について訴えた。「仮設住宅の一部屋に家族4人で住んでいます。狭さや騒音がストレスになり、食寝分離ができません。以前の家は、納屋も含めれば、仮設住宅の7、8倍の広さでした。もう一部屋ほしいと親が訴えているのですが、一年半たっても変化なし。出て行く人が増え、空き部屋が増えているのに、なぜ、有効利用しないのか？」と住環境の改善も指摘した。

復興については、「片付けが進む町には、誰の家があつたのか、何が建つていたのかさえわからない状態です。町を良いものに造り変える『復興』ばかりが叫ばれていますが、自分もお年寄りも地元の間人は皆、前の景色が見たいんです。町を元に戻す『復旧』をして欲しい」「最初の頃ボランティアさんがたくさん訪れたけれど、瓦礫が片付くとボランティアも減っている。もっと被災地

に来て欲しい」「町がどのようになるのか、戸倉小学校がどうなるのか、新聞に載って初めて知ったことも多く、地元の人に全く復興計画が伝わってこない」「子ども意見は、まず、聞かれることがない。大人がいつでもダメなのに、子どもがいつたけれど、この会に参加して自分の意見を聞いてくれる人がいるに、若い世代がもっと関わられるようにしていきたい」と訴えた。

子どもたちの率直な意見に対し、参加した大人たちは、被災地の子どもたちが情報発信できる機会を増やすことや、発信した情報や意見を関係各所に届け、現実的に反映させる仕組みづくりの必要性を確認しあつた。

◆東日本大震災子ども支援ネットワーク

<http://shinsai-kodomonshien.net/>

【寄稿文】

同じ被災者として 生徒に寄り添う

岩手県立高田高等学校 伊勢勤子

「持ち物はすべて流されました。私に残ったものは、その時着ていた白衣とサンダル、それから化学室のカギでした。」

3・11当日

3月11日の日、3年生はすでに卒業式を終えています。1、2年生は午前授業。部活動をしていた生徒、帰宅した生徒、学校近くのショッピングセンターやスーパーにいた生徒、バスや列車待ちの生徒などまぢまぢだったと思います。

国立大学の後期試験の前日でした。私は、次の日、盛岡の大学を受験する生徒の面接練習をしていました。3時頃には用事があつて市役所に行きたいと思つていたので、2時半頃になつても「先生、また、うまく言えないから、もう一度お願いします」といわれて、「志望理由をお願いします」などと聞いていた

ころでした。
午後2時46分、大きな揺れが化学室を襲いました。揺れが少しおさまったころ、彼と一緒に校舎から出ました。ほかの生徒や先生は、裏山にある第2グラウンド(2グラ)にすでに避難していました。彼に「他の生徒や先生が2グラに避難したようだから、一緒に2グラに行こう」と誘つたのですが、「明日は受験なので帰ります」と言い、帰つていきました。(彼が受けようと思つていた大学の入試は結局実施されませんでした。)彼が生きていることがわかる数日間、生きた心地もしませんでした。そして、彼がいなかったら、私は本当に生きてはいなかったでしょう。

その時、卒業式を終えていた3年生の生徒の中には、県外や内陸の大学を受験しに行つていたので、受験地から来た生徒もいます。しかし、受験地で、震災の様子を伝えるテレビを見ても、テストでは何を書いたのかも全く分からないという生徒もいました。推薦入学で合格が決まつて

いたのに、ついに大学生にはなれなかった姉妹、就職のために買ったスーツが家とともに流された生徒もいます。

1・2年生で被害が最も大きかったのは、水泳部でした。生徒たちは、ほとんど亡くなりました。海沿いの温水プールから市の指定避難所であった市民会館に避難していたためです。陸前高田市では、市の指定避難所に避難して、亡くなった人がたくさんいます。さらに、水泳部の生徒を探しに行った顧問の先生も戻って来ませんでした。

県内で最大の被害

岩手県立高田高等学校は、岩手県で最も被害が大きかった県立学校です。津波で校舎が破壊され、生徒22名、教職員1名が犠牲になりました。教職員の7割が被災しました。行方不明の生徒を探すために遺体安置所をまわる先生もいました。

また、ある生徒のお父さんが、高田高校の先生方がいた避難所（サン

ビレッジ）を訪ねていらして、「亡くなった子どもの遺影を作ってやりたいが、家が流されてしまって何もないから、学校に写真がないか」といわれました。学校も壊滅していたので、「探してみます」としか言えず、とても悲しかったです。

私は、担任を持っていなかったのに、2ゲラ（3月11日～18日）にいるときも、サンビレッジ避難所（3月18日～25日）にいる時も、地域のお母さんたちと炊き出しをしました。

3月25日からは、サンビレッジから大船渡市にある大船渡東高校の百九会館に移動し、避難所に指定していただきながら、教職員同士で共同生活を行いました。

震災で保護者を亡くした生徒は32名でした。一度に両親を亡くした生徒もいます。全校生徒の6割が被災しました。

保護者が亡くなったり家が流されてしまった生徒は、親戚などを頼りに転校した生徒もいます。今も、元気でいることを祈ります。

舎は20km以上離れているため、岩手県からスクールバスを出してもらって運行しています。昨年度は交通渋滞が引き起こされたり、全員乗車できなかつたり、冬場は毎日のように1時間目に遅れたりしていました。今年度はだいぶ緩和されてきました。が、スクールバス通学がインフルエンザや風邪の温床になっているのは否めません。

2011年の新1年生（現2年生、2013年度3年生）の合格発表

2011年度の新1年生は、震災前に受験は終えていました（2011年3月9日）。しかし、震災が起これ、合格発表は半月ぐらい遅れました。学校が津波で流され、すべてのデータも流出しました。ですから、誰が受験したのかも、受験番号も、点数も全く分からない状態でした。

受験者数は募集定員を少し切っていたことはわかっていました。そこ

で全員合格とし、合格発表は『全員合格』の4文字を掲示しました。これしか出せなかったのです。学校が壊滅していますから、大船渡高校の一角を借りて、合格発表を行いました。大船渡高校に合格した子たちが自分の番号を見つけて「やった!」という歓声が聞こえる横で、高田高校を受験した生徒が見たのは、『全員合格』の文字のみ。「合格はうれしかったけど、自分の受験番号を探すこともなく、ショックだった」と言っていました。

生徒たちの心身への影響

震災による、生徒たちの心身への影響も大きいと感じています。

2012年度に入り、4月中旬にはインフルエンザが蔓延し、学級閉鎖および学校閉鎖となりました。また、6月下旬には風邪様症状で不調を訴える生徒が一気に増え、早退、欠席が増えました。3月にも、インフルエンザで学年閉鎖となりました。

高田高校高田校舎は津波で全壊したため、統合によって空校舎となっていた隣の大船渡市にある旧大船渡農業高校の校舎を仮校舎として2011年5月2日から新学期がスタートしました。岩手県内では最も遅い始業式でした。

仮校舎は閉校時6クラスの生徒が学んでいました。その校舎に、1学年5クラスの計15クラスが入っており、とても手狭な状況で学校生活を送っています。

授業中、先生が教室で生徒の机の間を回って歩こうとしても歩けるスペースがない、図書室は教室となり、司書室に本棚をおいて図書館代わりになっているため、勉強する場所として使えない、3つあった理科室は1つとなり、実験設備も完全には復旧していない、仮校舎の近くでは部活動ができないため、バスで移動してから活動しなくてはならない、といったいろいろな不都合があります。生徒たちはそれを受け入れ日々暮らしています。

壊滅した高田高校高田校舎と仮校

た。

幼児のかかる溶連菌感染症やリンゴ病など、普通、高校生はかからない病気にかかる生徒がいます。現在住んでいる仮設住宅などの住環境やスクールバス通学などで、感染症にかかりやすい状況があるのかもしれない。生徒は元気づけに見えても、心も体も弱っているようです。

昨年度（2011年度）は不登校になって学校に来れなくなった生徒はほとんどいませんでした。問題行動もかなり少なかったです。しかし、2012年度は不登校が増えてきています。

震災後はスクールカウンセラーの方が来てくれるようになりました。学校が始まって最初の6週間は1週間交代で、毎日行っていたきました。その後、1週間に1回程度、他の高校と掛け持ちで来ていただいています。もう一つの高校と違い、高田高校の生徒からの相談はほとんどないということです。しかし、先生が相談もできますし、なくてはならない存在だと思います。できれば、

常駐していただければいいのですが……。先生方もかなり被災しているので、生徒だけでなく、先生への心のケアが必要ではないかと感じています。

話せない、話しづらい

2011年度は、震災を乗り越えようと、みんなが無我夢中でした。岩手県では児童・生徒のことを考え、教職員の人事は凍結されました。

被災しなかった生徒も、学校においてあったものは全部流されてしまいました。先生も生徒もみんな津波仲間でした。数か月ライフラインが断たれ、あの時の怖さや苦しさを共有していました。学校が再開してしばらくは「生きてて良かったね」以外、何もありませんでした。震災後、初めての私の授業では、「思いついたりして涙が出たりしたら、保健室に行ってくださいよ。私も泣きなくなったら、後ろを向いて、黒板をばりばり書くからね」と生徒に伝えました。

昨年度は、「先生、私、朝起きたら、あのことは全部夢で、町も家族も元のまなんじゃないかと、毎日思うんだけど、やっぱり違うんだよね。仕方ないんだね」と目に涙をうかべて話す生徒もいました。私も心からそれを願いましたが、彼女と同様、受け入れなければなりませんでした。

2011年9月頃まで、私は、実際にどうなったか、何が起ったのか受け入れられず、写真集をむさぼるように見たり、震災のテレビ番組を見まくりました。少し異常だった気がします。しかし、自分が午後3時頃行こうとしていた陸前高田市役所の屋上に避難した方が撮った映像を見て納得したのか、それからは見まわるといふことはなくなりました。

震災は今までの友達関係も危ういものになっています。「うちは家が壊れただけだけど、お母さんが亡くなった○○ちゃんに、なんていって声をかけてあげたらいいかわからない」と悩む生徒もいます。

2012年度には60名ほどの教職

る教員住宅に住んでいます。そのため、生徒の状況が見えづらくなっています。

震災前は、教職員のほとんどが陸前高田市に住んでいました。勤務が終わってスーパーに行くと、生徒にも会うし、保護者の方にも会うことが多かったです。「先生、あれどうなってるの?」などと話し込んだりして、生徒や家庭の情報が入っていました。今は学校も教員住宅も陸前高田市を離れ、大船渡市にあるので、教員がわざわざ陸前高田市に行かない限り、多くの生徒や保護者の方に会えなくなり、生徒の様子も保護者の方の様子もわからなくなっています。

震災の影響や保護者の仕事の関係で転居した生徒もいます。必要な支援をしつかり受けているのかどうか、今どうしているのか本当に心配です。

2011年度の3年生たち

2011年度3年生になる生徒た

ちの中には、震災によって進学をあきらめなくてはならないと思つた子がたくさんいました。

先生方もお世話になった避難所には中高生のための勉強スペースが作られました。そこには、支援物資の入っていた段ボールで作った『高田高校生物室』、裏に『高田高校理科室』と書いた看板を掲げて、みんな勉強しました。「大学あきらめなきゃいけないよね」と口にしながらも、みんな寒くて手がこごえてシャープペンがにぎれなくなるまで勉強していました。避難所で生活していた時には、この先どうなるか微妙でした。でも、その後、さまざまな支援が届き、「あきらめなくても済むのではないか」と、生徒たちも私たち教員も次第に感じるようになってきたようになったのです。

また、先生たちは、被災した生徒たちへの受験指導にも様々な気遣いをしてきました。学校が狭く勉強できる場所がないのも大変なのですが、避難所から仮設住宅に移っても周りに迷惑かけないようにと、受験

員のうち10数名の人事異動がありました。震災の時に高田高校にいた先生方が震災や津波のことを話していると、新しい先生は話に入れないこともあります。当然、体験していないので、震災の時の状況が理解できないこともあると思います。

生徒には、このようなことを話すとまずいかもしれないと常に気を遣い、何をどのように話したらいいか、とまどうこともあります。仕方のないことだとは思いますが、被災の程度の違いや被災経験の有無でお互いが気を遣ってしまうことがあります。先生同士や生徒と震災についての話が昨年度よりしづらくなっているのは事実です。

生徒、保護者の姿が見えない

現在、教職員は、被災した陸前高田市ではなく、仮校舎のある大船渡市に住んでいる人が多いです。私も、陸前高田市内には住むことができません、大船渡市の仮校舎の近くにあ

生なのに「早く寝ろ」と言われて、勉強ができないという生徒もいました。スクールバス通学も乗っている時間が1時間以上と長く、ぎゅうぎゅう詰めで、なかなか勉強できる状態ではありません。勉強できる場所を確保してあげたいと感じていますが、今も状況は変わっていません。

昨年度(2011年度)の推薦入学において、11月上旬の大学の推薦入学試験の面接試験で震災のことをすごく聞かれて、ずっと泣いて話せなかった子が出ました。これではまずいと思い、その後に受験する生徒には、震災のことや被害のことをしつこく聞いて、「面接会場で泣くよりも、今、泣いていけ」といって自分も泣きながら面接の練習をしました。今年度(2012年度)も、当然、同様に練習しました。

震災後、看護師志望の生徒が増えています。震災時に日本赤十字社を中心とした医療支援を間近に見たため、看護師になって貢献したいという気持ちが大きくなったのでしよう。看護師以外にも自衛隊、警察官、

消防士などの職業に人気が大きくなりました。

2011年度の卒業式

2011年度の3年生の生徒たちの中で、亡くなった生徒は12名でした。そして、帰らない同僚の先生1名もその学年を担当していました。私も含め、学年の先生方は、何とか卒業式で震災で亡くなった生徒の名前を旧担任から呼んであげたい、遺影で参加させてあげたい、卒業証書（もちろん、通し番号のないものです）も出してあげたいと思いました。しかし、2年生の時に亡くなったので、普通はそのような前例はないということでした。学年の先生方、もちろん男性の先生方も一緒に涙を流しながら、みんなで管理職の先生にお願いしました。

そして、迎えた卒業式。震災で亡くなり、遺影の生徒は、一番の親友に抱かれながら入場し、椅子に座り、担任の先生から名前を呼ばれました。通し番号はありませんでした。

震災直後（2011年4月）を思い出します。町も学校も壊滅しましたが、心あるたくさんの方から文房具や備品の支援を受けることができました。高田第一中学校をお借りしての登校日で、支援していただいたノートと鉛筆と消しゴムを生徒たちに配りました。あまり勉強が好きでないとと思われる生徒が、「先生、全部、津波で流されてしまって勉強できなくて困っていたんだ。もらって良かった。」と話す姿を思い出します。

支援についてはいろいろな考えがあると思います。「震災がなければ、アーチストや著名人が来たり、イベントなどなかったはず。普通の高校生活をするには、そういう人たちと関わらないほうがいいのではないかと、振り回されるのではないか」「非常時を過ぎれば、自力でやっていくために支援を受けないほうがいいのではないか」という考えもあれば、「震災で以前にはなかった問題を抱えた生徒や、時間がたつてもっと大変になっている生徒もいる。生徒に

が、卒業証書をもらいました。本当に心に残る、しかしもう二度とあつてほしくない卒業式でした。

2011年度は、本当に取材が多く、生徒が落ち着いて勉強できないと感じるほどのものもありました。卒業式にも40〜50名くらいの取材人が来ていました。来賓用のスリッパを勝手に履いていってしまい、来賓や保護者の方はスリッパを履かずに参加された方もいます。また、遺影を撮影しないように、写ってしまつたら本人がわからないようにとお願ひしたのに、守ってくださったのは、ごく一部のところだけでした。

亡くなった生徒の保護者の方も本当につらい卒業式だったと思います。お家の方の誰とも連絡の取れなかった生徒以外は、遺影を預けていただきました。その生徒の遺影は、入学式の時に写した集合写真から拡大して、学校で作ったものです。「あの子が行きたいと思うから」と、遺影は預けていただきましたが、学校にはいらつしやらなかった保護者の方、学校にはいらつしやいましたが、

必要な支援は受けた方がいい」という考えもあります。

いずれにせよ、返済不要の奨学金や就学の援助など本当に助けられた生徒は多かったです。今後も、被災者の生活の状況は、あまり変わらなないのでないかと感じており、奨学金などの就学援助は必要だと思えます。

また、私は理科の教員で、震災当時は化学を中心に教えていました。学校が壊滅し、教科書も問題集もガラス器具も薬品も（もちろん生物や物理、地学の教材、器具なども）すべて流出してしまいました。理科の学校の被災状況を写真にして岩手県の理科の先生方に、「捨てるものがあればください」と言って助けを求めました。理科教員としては、何とか生徒に実験をさせたいという一念でした。もちろん、がれきの中から拾い出したものもありますが……。2011年度には岩手大学の先生に、中和の実験で使うものをみんな持つてきていただいて、ボランティアで生徒に実験していただきました

式には出ることでできなかった保護者の方、卒業式の保護者席で卒業式をも見守っていたいただいた保護者の方、クラスに行って話をしたいとクラスメートに挨拶をしてくださった保護者の方など、本当にお辛かったと思います。私は、卒業式当日、そのような保護者に付き添う係でしたので、その心情がひしひしと伝わってきました。

支援の捉え方

2011年度の終わりには、仮校舎での入試を行うことができませんでした。もちろん、合格発表も通常通りの番号で貼り出すことができませんでした。苦しかった1年が過ぎ、2012年度が始まりました。学校生活も少しずつ落ち着きを取り戻しました。校長先生からは、「震災のせいで学力が低下しないように、授業を工夫して欲しい」と方針が出されました。そのように考えることができたのは、たくさんの人からの支援があつてのことでした。

た。バスを出していただき、岩手大工学部や岩手県生物工センターに生徒を連れて行って実験させていただきました。2012年度にはリバネスさんや日本農芸化学会さんからの支援をいただいています。

被災していると、生活や今をこなすのに精一杯で、冷静にどんな支援が必要か、わからないことが多いです。その状況を理解しながらに入つて、こちらのニーズを引き出していただくようなボランティアも必要だと思います。

高校生のボランティア

生徒たちは2011年度から自分たちも大変な状況なのに、陸前高田市の被災した人たちのために何かしたいと感じていました。私は、JRC（青少年赤十字）同好会の顧問だったので、生徒と一緒に何ができるか考えました。がれき撤去の作業は危険もあり、部活動では取り組むことはできませんでした。しかし、8月に2グラにできた高田高校仮設

住宅の交流会でのボランティアに参加させていただき、それ以降、つながりを持って活動することができています。この仮設住宅は、当初いろいろな町内から人が集まっているので、なかなかイベントなどができなかった状態でしたが、現在は、陸前高田市でも自治会がうまく機能している仮設住宅の一つです。

また、NHKの番組（Eテレのフレフレ）で大阪の佐野工科高校と交流することができ、仮設住宅に手作りの入浴剤を届けることができました。三菱UFJ銀行のボランティアの方や県内の前沢高校や岩谷堂高校さんとの交流も続いています。たくさんの方に支えられながら、交流しながら、自分たちもボランティアをして誰かの役に立つ体験ができました。

私は、顕微鏡の支援を行ったり陸前高田市にあった『海と貝の博物館』にあったツチクジラのはく製（つつちい）のレスキューに参加しました。被災地の文化財レスキューに関わるたくさんの方と知り合い、

たくさん感動とパワーをいただいています。

このような体験は、震災前にはなかったことで、自分にとってかけがえのないものになっています。

「声をあげる」と、語り継ぐことの大切さ

震災から数ヶ月たった頃、日本赤十字社のドクターから「何か困っていることはないですか？」と聞かれたことがありました。教育相談担当の先生が、「心のケアが必要な生徒はいますが、うちの学校以外にも、ひどい被災をしたり生徒が亡くなったたりしているところもあるから、うちの学校だけが困っているとはいえません」と答えました。すると、ドクターは「高田高校は、岩手県内の高校で最も校舎の被害が大きく、亡くなった生徒数も一番多い。その学校が声をあげなければ、他の学校は何も言えないですよ。高田高校から声をあげてください」といわれました。私はその話を聞いて、「生徒

や学校の状況をできるだけ外に伝えていかないといけないのではないかと考えた方がいました。

今回の震災は誰もが経験したことのないことなので、今後その影響で何が起るか、今は誰にもわかりませんが、2013年度は、壊滅した高田高校で学んだ生徒はもういません。すべての生徒が、震災時、中学生だった子たちです。今後、あの時、小学生だった生徒が入ってきます。

その生徒たちが入学してきたときに、陸前高田市をはじめとする被災地で、被災体験のある先生がほとんどいなくなるかもしれません。でも、被災経験がない先生だからといって、震災を経験した生徒のことがわからないでは済まされません。そう考えれば、被災した学校に赴任する先生は、震災について理解するため、事前にその地域の語り部の話を聞いたり、映像や書いたものを読むなどの事前研修がますます必要になってくるのではないのでしょうか。

2011年度も、2012年度も地震が減りません。昨年の大きな地

震では、10cmの津波がきて道路がダメになり、携帯がつかなくなったり、

生徒は保護者が迎えにくるまで学校で8時過ぎまで待機することがありました。仮校舎は高台にあり、津波の心配はありません。しかし、備蓄等については、具体的なことを行っておらず、夜になっても生徒たちに食べさせるものがありませんでした。災害時の対応についてのマニュアル等を作っていた矢先のことでした。早急に備蓄を含めた災害時の対応を完成させなくてはならないと強

く感じました。

人間は、知恵の生き物だけれど、忘れる生き物でもあります。今まで何が起こったか、どういうときに困るか、経験したことを残して教訓にして、常に生徒への影響がないように考えていかないと強くと感じます。

怖くてつらいことですが、私の尊敬する高田高校に勤務なさっていた先生がおっしゃったように、「生徒や先生がどこでどうして亡くなったのか、どこでどうして助かったのか、

どのように行動したのかを調査し語り継いでいかないといけない。犠牲になった生徒や先生の死を無駄にしてはいけない」という言葉が、現在、私を動かしています。

高田高校の新たな校舎は、現在、工事が始まり、2015年に完成の予定です。被災の痕が残る環境であっても、感謝の気持ちを忘れず、生徒たちが少しでも充実した高校生活を送れるように自分も微力ながら頑張りたいと思います。

東日本大震災による 変化と影響についての アンケート調査

岩手県立高田高等学校（2012年度）

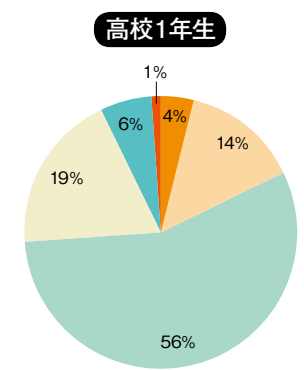
・1年生 178人
・2年生 170人

岩手県立高田高等学校は、岩手県で最も被害の大きかった高校で、津波で校舎が破壊され、生徒22名、教職員1名が犠牲となった。現在、隣の大船渡市にある旧大船渡農業高等学校を仮校舎として再開したが、9クラス分の教室のところに、1学年5クラスの計15クラスの生徒が学んでいる。仮校舎は元の場所から20数km離れているため、岩手県が陸前高田との往復のスクールバスを運行し、生徒は片道1時間かけて通学している。

このような環境で過ごす生徒348人（2012年度の1年生と2年生）に、震災による変化や影響についてアンケートを行った。震災当時、1年生は中学2年生、2年生は中学3年生で受験が終わり合格発表を待っている時だった。

Q1

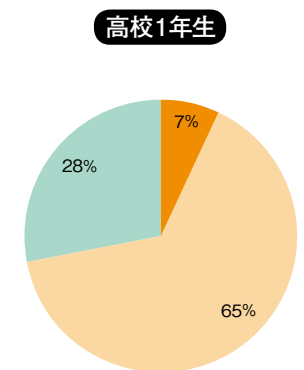
震災の前後で学校の成績は変わりましたか？



1年生も2年生も6割が「震災前後で成績は変わらない」と答えている。

Q2

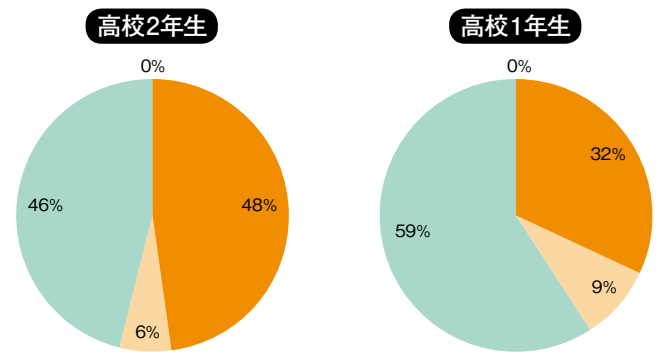
震災の前後で家庭学習の時間は変わりましたか？



家庭学習の時間について、2年生の方が「減った」と答えている割合が多い。

Q3

現在、何か不安なことはありませんか？



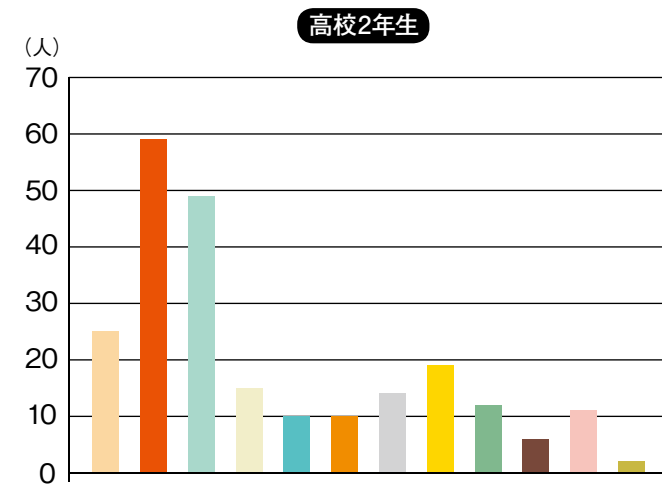
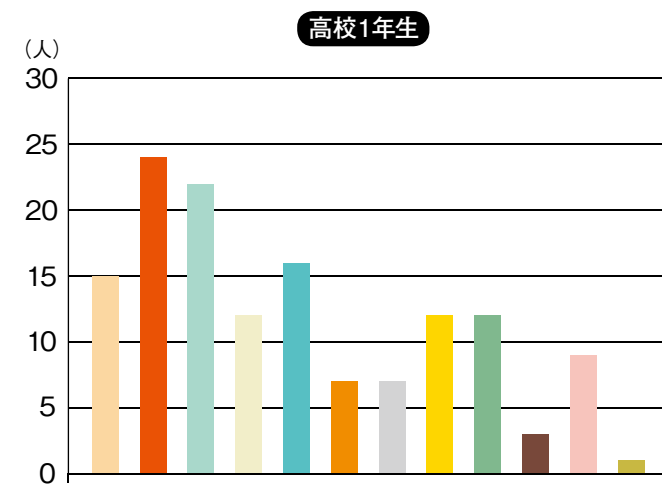
「現在、不安がある」と答えている割合は、1年生は3割だが、2年生は半数と高くなっている。

- 不安がある
- 以前は不安があったが今は解消した
- 特に不安はない
- 無回答

Q4-1

どのような不安ですか？
(複数回答)

Q3で不安があると答えた生徒のみ回答

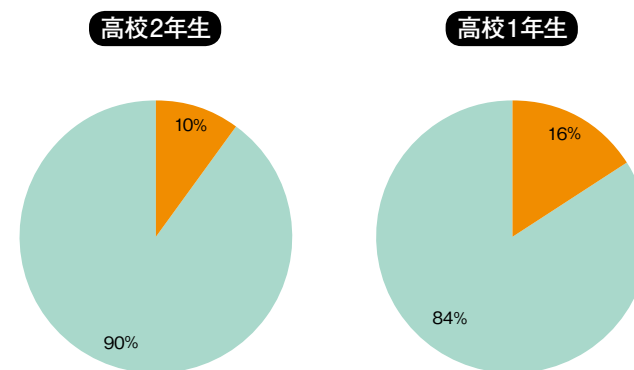


「受験や進学」を不安とする人数は、1年生の24人に対し、2年生は59人にのぼる。2位の「将来について」は、1年生は22人、2年生は1年生の倍以上の49人。3位は、1年生は「部活」16人、2年生は「勉強の遅れ」25人。

- 勉強の遅れ
- 受験や進学
- 将来について
- 友人関係
- 部活
- 家族のこと
- 経済面
- やる気がでない
- イライラ・カッとなる
- 健康(身体面)
- 健康(精神面)
- その他

Q4-2

その不安は、震災の影響が大きいですか？

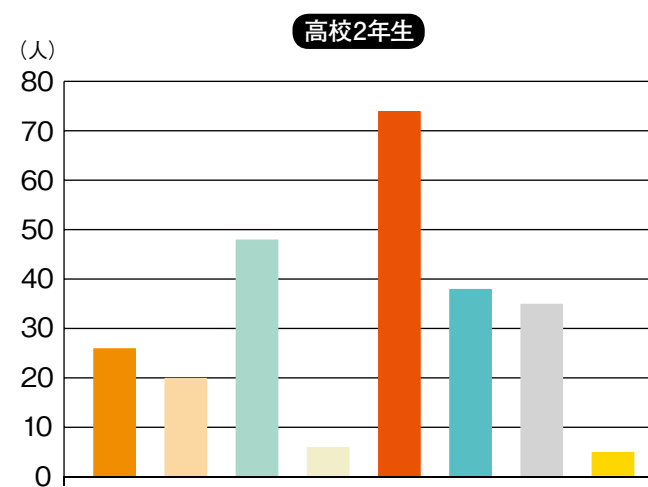
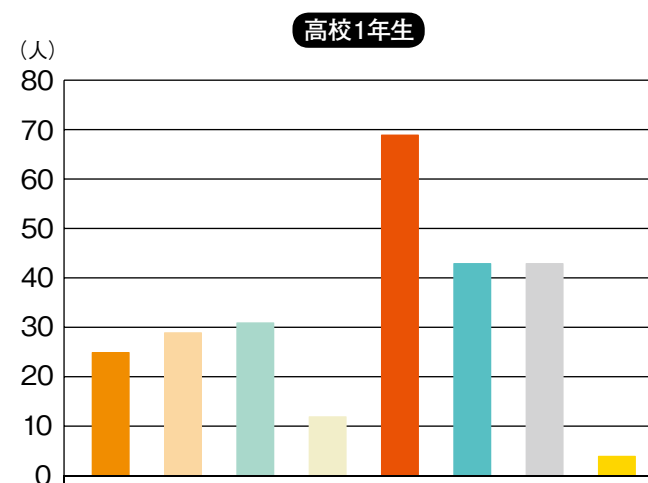


「不安は震災の影響」と答えたのは、1年生は10%、2年生は18%と低い。高校生活の不安が震災によるものかどうか判断が難しいのではないかと推察される。

- 震災の影響が大きい
- 震災の影響は大きくない

Q5

今後どのような支援があればよいですか？

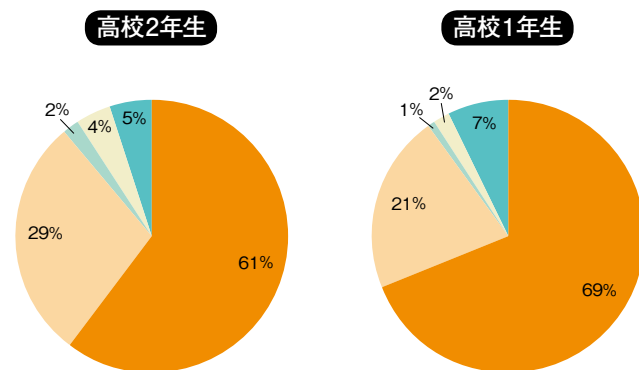


1位は、1年生(69人)も2年生(74人)も「就学援助や奨学金などの経済的支援」をあげている。2位は、1年生は「教材や参考書」「特に支援は必要ない」が43人に対し、2年生は「進学・進路相談」48人。

- 休日や放課後の学習支援
- 休日や放課後の遊びの支援
- 進学・進路相談
- 専門家による精神面のケア
- 就学援助や奨学金などの経済的支援
- 教材や参考書等の支援
- 特に支援は必要ない
- その他

Q6

現在の住まいは？

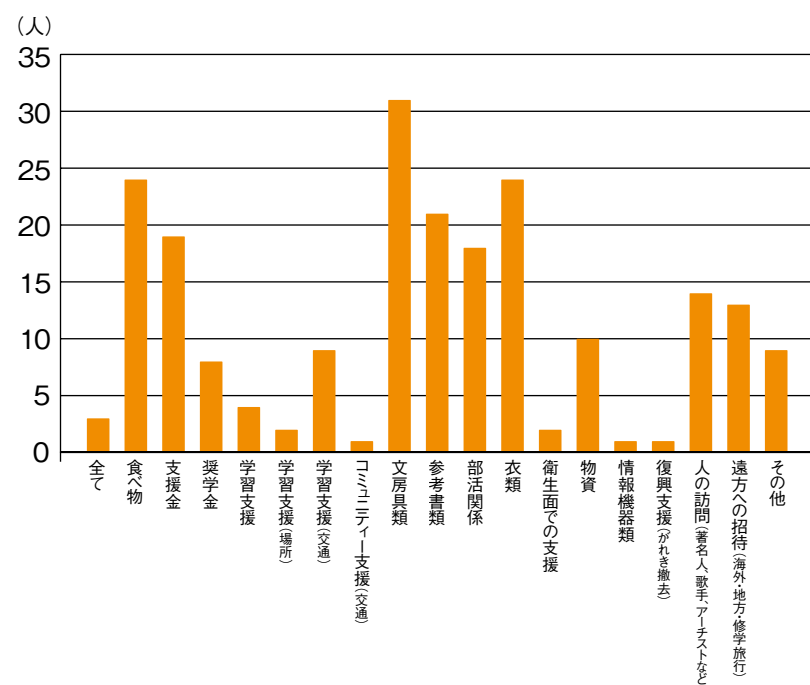


1年生の7割、2年生の6割が震災前と同じ家に住んでいる。「その他」には、「震災後に建てた家」「母の実家と仮設の行き来」など。

- 震災前と同じ家に住んでいる
- 仮設住宅
- みなし仮設
- 親戚宅
- その他

Q7

今まであった支援で、これは良かったというものあれば、お書きください(複数回答)



「文房具」31人、「衣類」「食べ物」24人、「参考書」21人と物資の支援が多い。町が流失し、買物に遠方までいかないとけない地域の中高生には、衣・食と勉強道具など「モノ」の支援が大切であることがわかる。

Q8

現在、勉強や学校生活に関わることで、
気になることがあれば、お書きください。

▼通学・バスについて

- ・バスの台数をふやしてほしい。
- ・スクールバスの件で、広田方面は早いバスがあるが、高田方面からの早いバスがないため、朝練をする際に親の方への負担が気になる。
- ・学校へ来るのに毎日往復2時間はキツイ。
- ・バス通学が大変。

▼学習面

- ・学習面でどのように勉強の質をあげるのかわからない。集中できない時が多く勉強法がわからない。受験のテクニック、勉強できるようになるやり方。勉強のやる気がない。

▼環境

- ・仮設住宅にすんでいるため、なかなか自由に勉強したり集中することができないので早く落ち着いた生活をしたい。

▼新校舎、元の場所に戻ってほしい。

- ・仮校舎ではなく、早く、新校舎が建てばいいと思います。高校がもとの場所に戻ってほしい。

▼進路・将来への不安

- ・進路が不安。進路、将来への不安。ありすぎてかけない。

自身の解決ができなくてもやもやしている。

- ・進級できるか不安。授業についていけない。
- ・遺産云々のゴタゴタにまぎまぎれて精神的につらい。
- ・震災後、精神的なストレスがらくる体調不良が増えたので、不安。
- ・まだいまでも余震がこわい。

▼要望

- ・早く高校ができてほしい。
- ・はやく学校たててほしい。
- ・いいグラウンドの土が欲しい
- ・奨学金支援の幅を広げてほしい。
- ・進路実現のためにより多くの大学や短大、専門の資料が欲しい。病院がないところに病院をつくってほしい。土日も病院をやってほしい。
- ・本当に困っている人、困っていない人をみわけるようにしてほしい。本当に困っている人にしっかりと支援してほしい。私もいま、経済的にこままっている。進学にいくためのお金や学校見学にもいけなさがする、そういうのも支

援してほしい…。
1人になる時間が欲しい。

▼支援への感謝

- ・震災があつたけど、県外の人たちが支援をくれたおかげで、一歩ずつ前へ進めたと思う。
- ・支援してくださった方々のために物をしっかりと扱いたいし、復興のために自分もやれることをしていきたいです。
- ・支援に感謝しています。
- ・みなさんの支援のおかげで今の学校生活を送ることができています。ありがとございます。
- ・いろいろな考えて下さってありがとございます。
- ・支援に対し、必ず恩返しをしたいと思う。
- ・震災から2年がたとうとしてる今現在でも支援をしてくださる方々には本当に感謝しています。自分は野球をしています。地域の方々からたくさん応援していただいてうれしいです。震災を受けた地域に勇気を与えられるプレーをしたいと思っています。
- ・色々と支援していただき本当にありがとございました

Q9

今の思いを、自由に書きください。

▼復興について

- ・都会だったら絶対にもっとはやく復興していると思う。いつになったら震災前のような暮らしに戻れるんだ？
- ・今は落ち着いている。たまに家族と震災のときのことを思い出して話す。早く復興すればいいなと思う。
- ・まもなく震災から2年が過ぎようとしているけど、まだ、復活とは呼べない。元の町に早く戻ってほしい。
- ・日々復興に向けて何か出来る事があれば協力していきたい。
- ・早く住み心地がよい町になってほしい。
- ・だんだんと復興してきて以前の生活と同じようになってきた。もっと復興して元の町の戻ってほしい。

▼不安

- ・不安です。
- ・特にありません。でも、もう震災はおきてほしくありません。相談できる人が少ないので、

支援して下さったものを大切にしていきたい。

- ・震災から日にちがかなりたちますが、今まで私達のことを気にかけてくれたり、支援してくださってありがとございます。
- ・たくさんの方々の支援のおかげで、たくさんの方々が感謝しています。
- ・支援してくださった方々の気持ちに答えられるように、恩返しできるように頑張りたい。
- ・たくさんのご支援ありがとございます
- ・たくさんの方々の支援をいただいているので感謝の気持ちを忘れず、その支援してくださった方に支援してよかったですと思っていたようにしっかりと頑張ります。

すばらしい友人に囲まれて震災の心の傷はなくなってきた。あとは、支援してくださった方々に「恩返し」「恩送り」をしていきたい。

- ・たくさんの方が私達のためをおもって支援してくださって本当にうれしいです。
- ・色んな支援をしてもらって、今までと同じような生活できて

戻ってほしい。
早く復興して昔の町に戻ってほしい。

- ・震災で全壊した町は今も全然かわらないので早く復興してほしい。
- ・自分たちの町を必ず復興させたい。他の町にも元気をおくれたいと思う。
- ・もう2年経つことになるが実際復興は進んでいないと思います。自分たちが大人になった時、より良い町にしていきたい。
- ・早く復興してほしい。

▼不安

- ・不安です。
- ・現在でも多くの方々に支援をいただいているので感謝の気持ち忘れずに何事にも一色懸命取り組みたい。
- ・たくさんの方々の支援をしてくださっている支援のおかげもあり自分たちが生活できていると思う。自分はバス通学なので通学面で支援してくださっているのでもともとありがたい。今後とももとの状態になるまで時間がかかると思いますが、支援を続けてほしい。たくさんの方々の支援をしてくださっている人には感謝したい。ありがとございます。
- ・皆さんの暖かいご支援のおかげで毎日快適に暮らしています。

いることがうれしい。

- ・うけた支援以上のことをできるようにになりたい
- ・震災による心や身体への影響はあまりなくなってきた。進路に向けて頑張っていきたいです。

▼がんばる

- ・うけた支援以上のことをできるようにになりたい
- ・震災による心や身体への影響はあまりなくなってきた。進路に向けて頑張っていきたいです。

大変な毎日のなかで、「要望」や「不安」より、「支援への感謝」を書いた生徒がたくさんいた。「支援を恩返しできるよう頑張りたい」という言葉の多さは、さまざまな支援が生徒たちを支え、明日を生きる原動力になっていることを表している。

【インタビュー】

チャンスや支援の多い東京で頑張る

東京都 本田サラさん(仮名)

気仙沼からの避難

サラさんは、故郷であるインドネシアで1995年に日本男性と結婚。長男の出産を機に、夫の実家のある気仙沼にやってきた。その後、4人の子どもに恵まれた。

仕事は、長男が1歳になる前から、市の紹介でインドネシアの船員の研

修生たちの通訳を始めた。インドネシアと気仙沼は交流が深く、気仙沼市に訪れた大使の通訳を行ったこともある。研修生のいないときは食堂や工場などで働いた。「子育てで忙しかったですが、町のみんなはすごくやさしくて温かくて、いい人ばかりでした」。

3・11当日、町は津波でかなりの

被害があったが、サラさんの家族も家も無事だった。しかし、1000

人以上いた研修生はインドネシアに帰され、サラさんの仕事はなくなり、大家さんの家が津波で流されたため、サラさんが住む家に戻って行くことになった。「大家さんは一緒に住んでいいよといってくれたんですが、中2、小4、小3、4歳の子ども4人もいて言葉の問題もあり、難しいから出ようと決めたんですが、車も流され、仕事もなくなってしまうし、どうしよう……」。1週間後、市役所に設置された非常電源で携帯を充電したところ、東京の大使館に勤める知人から何本もメッセージが入っていた。「どうしたい？こっちに来る？食べ物、送ろうか？」

一旦東京に避難することになり、東京からバスを寄こしてくれた。一関に一泊し1週間ぶりのお風呂に入った。その後、大使館の施設に、約3週間お世話になった。そこには、他の地域で津波被害にあったインドネシアの人たちが避難してきていた。しかし、そこにはそう長くは

られない。

「東京ビッグサイトが避難所でオーブンすると聞いたので行くことにしました。大使館から、インドネシアに帰らなかったら費用は出すといわれたのですが、日本で生まれた子どもたちのことを考えて、東京でしばらくやってみようと思いました」。

東京ビッグサイトと赤坂プリンスの避難所で

東京ビッグサイトの避難所では、配布された板で間仕切りをし、毛布4〜5枚を敷いてベッドにした。食事は、近くのお店で食事できるチケットをもらった。

「ビジネス街なのでスーツ姿の人たちに混じって、子連れで食事するのは気を遣いました。田舎から服もろくにもってこなかったのです。でも、子どもたちは、今までいくつか避難していた場所のなかでは、ビッグサイトが一番気に入っています。ゆりかもめで大江戸温泉物語のお風呂に行ったり、朝になるとパンを好きな

だけ食べられるのが楽しかったようです。『こんなにいっぱい食べていいの？』なんていって。

それに24時間ボランティアさんがいて、夜も人がいる限りテレビがついていて。余震が頻繁にありましたが、大人がたくさんいて安心感もあつたようです」。

ビッグサイトが4月末で閉鎖と聞いて、サラさんは慌てた。福祉の人から「子どもたちの学校はどうしますか？」と聞かれ、また気仙沼の先生からは「学校は始まっていますか、どうしますか？」と連絡がきた。東京に残るか、気仙沼に帰って仮設住宅に応募するか。かなり悩んだ。その頃、赤坂プリンスホテルの避難所があるのを知った。しかし、部屋代と光熱費は無料だが、朝食300円、昼食と夕食は各500円かかると言われた。家族5人分の食費負担は大きく不安はあつたが応募した。しかし落選。味の素スタジアムの避難所も応募していて、ものすごい倍率だった。「その数週間後、食費は無料になっ

たといわれ、もう一度、抽選に応募したら当選しました。当選番号が貼り出されるのは、まるで受験の合格発表みたいでドキドキでした」。

赤坂プリンスの避難所には小学生が多く、教育委員会の人が手続きをスムーズに進めてくれた。

「あなたは、こっちにいきなさい、というのではなく、先方から来て学校に通うための手続きをやってくれました。文房具やジャージの購入などの指示や免除もしてくれましたので、千代田区の教育委員会には、大変お世話になりましたね」。

イベントや物資など、把握しきれない程、多種多様な支援があつた。「2階の千代田ボランティアセンターの窓口では、小児科や買い物の場所など日々の生活に必要な情報を教えてくれて助かりました。地下の学習室では、NPOの人たちが子どもたちの宿題や勉強をみてくれました。無料の学習支援は、まだ続いています。本当にありがたいです」。

サラさんは、赤坂について、TBSがあることくらいしか知らな

かった。赤プリの避難所の最寄り駅が国会議事堂のそばの永田町で驚いた。「こんなに高級な町なんて全く知らなかった。スーパーもない、公園もない、買い物は大変で、子育てしながらの暮らしは、しづらい町。実際に行くまで何も知らなかったから、入れてもらえるなら、どこでもいいです、という感じでしたね。もし事前に赤坂がこんな風だと知っていたら、いろいろ考えてしまって、気を遣ったり、落ち込んだりしたかもしれません」。

赤坂プリンスの避難所は6月末に閉鎖されたが、千代田区の学校に通い始めた子どもたちが同じ学校に通えるように、都が千代田区内に用意した住宅に7月から入ることができた。入居当初は、買い物する場所もなく、子どもに使うものを買う場所もわからなかったが、半年で慣れた。家賃は無料。自転車での移動がほとんどなので交通費もかからない。一番の出費は食費だ。住宅の使用は2年間の予定だったが、1年間伸び、2014年の7月末までになった。

戻ってきた長男は、友達もでき、なんとか高校生活を楽しんでいるようだったが、11月頃に部活を止めたことを聞いて心配した。「若いんだから身体を動かさないとダメだよ、は言ってるんですが。いつもは私のいうことを聞いてくれるんですが、部活を止めた理由はいつてくれませんが、んですよ」と少し不安だ。

小学生の2人は、都の住宅のなかで最も元気で学校も欠席はゼロ。「うちの子たち、私に性格が似てきて、あまり落ち込んだりしないので。その点は助かります」。

ただ、勉強の遅れは気になっており、学習支援のNPOを頼りにしている。

「東京で子ども支援の団体に子どもを預けられたとき、本当にいいの？と思いました。朝から子どもに勉強を教えてくれ、面倒みてくれ、遊びに連れていってくれるなんて。本当に素晴らしい。今までこんな支援を受けたことはないで驚きました」。

小学生の2人が中学を卒業するま

子どもたちについての不安

赤坂プリンスの避難所から学校に通い出した中学3年生の長男は、新しい環境になかなか馴染めなかったが、小学生の2人は友達がたくさんでき、特に小4の長女は寝る以外は部屋に帰ってこないほど、ずっと友達と遊んでいた。

「周りから見ると、うるさい女の子と思われるかもしれないですが、逆に元気で良かった。風邪もひかず、大きな病気もしないのが、今、思うと、助かりました」。

長男は次第に友達にも恵まれ中学校に慣れていった。そして、高校受験。都立高校を受験したが不合格。それからあちこちの支援者を介して探した地方の私立高校に合格し、学費など免除で通えることになった。「通える範囲と受検した高校はレベルが高かったんだと思いません。東京の学校のことは全然わからず、先生や他の人にもっと相談すればよかったのですが、私が動くのが遅かったのが悪いんです」。

で、同じ区域に住めればと思ってるが、来年の8月以降は、どうなるか全く不明だ。

東京で自立をめざす

サラさんは、東京に避難後1年間は失業保険をもらい、昨年からは徐々に仕事を始めている。千代田ボランティアセンターと社会福祉協議会の被災地応援プロジェクト「まもりたいゾウ」タオルづくりで週1日、あと2〜3日は料理研究家、枝元なほみさんが主宰する農業支援団体による復興支援プロジェクト「にこまるプロジェクト」のクッキーづくりに参加している。

東京での避難暮らしを始めた頃、様々な支援があるのを知り、「子育てしなきゃいけない私が、支援なんて頂いていいんでしょうか？」と弁護士に尋ねたところ、「仕事は誰でもできる。でも、子育てこそ、誰でもできることではありませんよ！」と言われた。また、避難所で「こんなこ

入学が決まったのが3月の終わり頃。母親としては、高校1年の息子をひとり暮らしをさせるのは不安で迷い続けた。生まれた町を離れ、東京で1年ほどの不安定な避難生活が、やっと慣れた頃だった。しかし、本人の行く意志は堅く、住む場所探しに奔走した。

「東京で紹介してもらった人のところに、しばらく下宿させてもらえることになっていたので、入学式の土曜日、実際に行ってみると様々な理由で無理だということになって。それから、アパート、お寺などいろいろ見ました。入学式の後、他の親子は、『おめでとー！』といってご飯を食べているのに、自分は、月曜から学校が始まる息子の住む場所も決められない。避難してきた今までのことを思い出しながら、息子のことを思うと『イヤになったら、いつでも帰ってきていいよ』と言って泣いてしまいました」。

長男には頑張っただけだと頼りにする一方で、無理をさせたくないという複雑な気持ち。年末に東京に

とを言ったら凶々しいかな」と他のお母さんに相談したら、「子どもに必要なことは、どんな言わなきゃダメよ。ものだって情報だって、子どものためには、ないよりあったほうがいいに決まってる。母親が頑張らなきゃ」と言われ、「欲しいな、あったらいいな、と思ったことを口にしていいんだ」と思い直したサラさん。

「東京には、いろいろな支援があるし、チャンスもある。田舎だと仕事の数も種類も限られるけれど、東京だと短時間の仕事や夜だけのお弁当作りや掃除だってある。しばらく、東京で子どもたちと一緒に頑張ってみます」。

いろいろな支援に囲まれ、少しでも自分で生活できるようになったら、ボランティアや人を助けたいというサラさん。自立心が強い自分にとって、東京は向いているかもしれないという表情は、とても明るかった。

【インタビュー】

東京へ母子避難、 納得のいく暮らしを 求めて岡山へ

東京都 菅野久美子さん

東京の友人からの電話で 避難を決意

菅野久美子さんは、シングルマザーで、娘と2人で伊達市から東京に避難してきた。

3月15日、東京の友達から「避難するんだったら、うちに来て大丈夫だよ」という電話があった。「その電話で私は、東京の人から見れば避

難をしてもおかしくない場所にいることを客観的に理解し、東京への避難を決めました」。当時は車が使えず、新幹線も動かず、バスを乗り継いで那須塩原までたどり着き、そこから新幹線で、3月21日に東京に到着した。

友人宅に身を寄せたものの、いつでも親子2人で居候しているわけにはいかない。そう思っていた3月

末、会社から「4月から通常通り会社は営業するのですが、戻ってくるんでしょう?」、母親からは「いつまでそっちにいるの?」と電話があった。東京に到着後10日程で、再び決断を迫られることになった。

「一度、避難してきてしまうと福島に戻るものが怖くなった。放射能やまたいつ原発が爆発するかわからないという不安がありました。それに震災も原発事故もなかった事のように通常の暮らしに戻ろうとする会社の空気感に違和感を感じたんです」。福島には戻らない決断をし、家、仕事、保育園を一から探すことにした。

インターネットで見つけた母子避難者をボランティアが受け入れる仕組みを利用して、新たな住まいを見つけた。新しい住まいを見に行った帰りに他の手続きについて聞こうと区役所に立ち寄ると、震災から1ヶ月もたつてなかったため被災者用の制度が整っておらず、一般の転入者として扱われ、「保育園に入るにはまず住民票を移してください」と言われた。一旦、福島に戻り、子ども

の服やおもちゃ、自分の身の回りのものをダンボール4つくらいにまとめた。ボランティアの家に住み、保育園の手続きを進め、6月から入居することができた。

新しい暮らしでのストレス

新しい環境で新しい暮らしが始まった。「次は、仕事を見つけないといけないなあ、いつまでこの家にお世話になるんだろう、また引越したら保育園を見つけないといけないなあ……」と考えているうちにストレスが積み重なり、感情のコントロールができなくなった。

「何かのきっかけで娘に怒り出した時に怒鳴り声が止まらなくなったんです。頭の隅では、そんなの言い過ぎだよとわかっていながら、口が怒鳴るのを止められない。このままいくと手が出る、足が出る……。自分で危ないなと感じました。このまま仕事を見つけたところで、また新しいストレスを抱えてしまう。そのストレスが向かう先は子どもなんです

よね」。

仕事を探すことを一旦諦め、職業訓練校に行くことにした。すぐに家や仕事を探す必要がなくなったため、気分は解放された。娘が保育園に通い出すと、生活のリズムも整ってきた。

当時、娘は春から年中児の年。生後10ヶ月から保育園に預けていて、ちょうど同じ年頃の子どもたちと遊ぶのが楽しくなってきた頃とあって、避難後、自分を通えない幼稚園や保育園の園庭をうらやましそうに見ていた。公園で友だち同士で遊ぶ子たちに声をかけられず、いじけたりしていた。保育園に再び通えるようになると前にもやむを得ず何度か託児所を利用したが、乳児がほとんどの民家の一階を利用した託児所は泣いて嫌がった。一緒に出かければ、車生活だった福島と違い、バスや電車を乗り継がなくてはならないため「もう歩けない」と座り込む。そんな娘にまた怒鳴る。そんなことの繰り返しだった。

ようやく生活が落ち着いてきて、

このままでいいの? 変わりたい!!

家も仕事も保育園も決まり、震災前と同じような生活を取り戻し、新しいスタートを切ったが、何かが違うように感じた。「こんなに血と汗が滲むような苦労してきたのに、何の保証もされないまま、ここで何事もなかったような顔をして暮らし

ていつていいの？」場所が変わっただけで、前と同じ生活を送ることに違和感を感じた。自分の中に「変わらない自分」と「変わりたい自分」がいて、このまま忙しさに流されていくような生活でいいのかという疑問がわいた。

「変わっていききたい」。

そう感じてから菅野さんは、知り合った子どもたちや母子の会を通じて自分の話を語ることを始めた。いろいろな人と出会ってネットワークができ、自分の世界が広がっていった。

2013年の春に娘は小学校に入学する。このまま東京で進学させていいのだろうか。「このまま東京で仕事を見つけて生活を続ける未来を選ぶのか、福島に戻る未来を選ぶのか、違うものを探すのか」。3つのビジョンが見えてきたのは、2012年の夏だった。

「落ち着いた生活を私自身、あまり大事に思っけなかつたのかもしれない。東京での生活は経済面から見ると落ち着いたのかもしれないけれど、

ど、生活自体は少しすすんでいました。自分で借りた部屋なのに、いつかは出て行くだろうと、家具1つ買おうとせず、本も山積み、おもちゃも山積み。娘はこの部屋のどこで勉強するんだろう？ここにずっと住むの？なんか違う」。夏に、もう少し変わっていききたい気持ちが芽生え始めていた。

福島へは帰れない

「避難ではなく移住する」としたら、どこがいいだろう」。

そう考え始め、福島に帰ることも考えた。しかし、福島は不動産バブルで、なかなか物件が見つからない。警戒区域から避難した人たちは、仮設住宅や借り上げ住宅での生活が限界になり、新たに家を購入したり引越したりする人が増え、新しい家を借りようとするのが非常に難しい。

9月にいとこの結婚式があり福島に帰った。持参した線量計を窓際に置き、なんとなく30分ほど見ていた。窓際で0.3μSv/hから0.4μSv/h。窓

を開けた瞬間に20μSv/h〜30μSv/hを示し、一瞬警報音がなった後、すぐに0.4μSv/hに戻った。

父が娘を公園に連れて遊びに行く時、「公園に行こうか、でも30分だけだぞ」と当然のように時間制限が父の口から出た。

「あ……こういう環境で生きていくってことなんだと改めて気づかされました。私にとって福島で暮らすということは、両親や祖父母と一緒に暮らすことが大前提。福島に帰る。実家での暮らし。私はこんな場所に帰って以前のように暮らせるか？きつとも無理だと思いました。両親と祖父母、誰も私の避難に反対せず理解をしてくれて、とてもありがたいのだけれど、この人たちと一緒に同じ価値観で暮らすのは、もうとても難しいなあと思っけしまつたんです」。

もう1つ理由があった。実家に帰るとなると、震災時に基板工事、原発の事故後にコンクリートで固め、震災から1年後にできた小学校に娘は通うことになる。その学校の

グラウンドのモニタリングポストは0.09μSv/hくらいを表示していたが、校内は0.3μSv/h。つまり、外より校内の方が線量が高い学校に通わせることになる。収入が高ければ私立も視野に入れたかもしれないが、シングルマザーの菅野さんには、その選択は難しい。「福島に帰ると、その公立の小学校に通わせるしかないけれど、それは絶対に無理！」。

福島の家族と見ているものが違ってしまっていることを実感し、もう福島には帰れないと思った。

自分の居場所とは？

菅野さんは、このまま東京で暮らすこともイメージができなかつた。

「東京で娘が小中高と進学するのも想像できないし、自分が満員電車に揺られて通勤するのも無理。福島に似たような田舎で、のんびりした子育てができる方がいいな。収入が減つても、支出を減らせばいい。農業短大を出ているので、農業ができるところでもいいな」。

そう思っけ菅野さんは、岡山に避難した人たちのメーリングリストに加わり、四国に避難した人にコンタクトをとり、行政や環境や物件についての情報を集め始めた。しかし、なかなかいい情報に出遭えない。さらに福島県が他県に対し県内からの避難者を受け入れないように通達を出した。「これは絶望的……」。現在の住まい近くの小学校に通わせるしかないかなと思っけいた矢先、岡山から良い物件があると朗報が届いた。年末休みだったため、すぐに下見に行った。役所にも近いし、環境も良い。大家さんと両親と話がトントンと進み、東京から避難した人たちとも仲良くなつた。

紹介者の家に泊まることになり夜出かけようとすると、「ここで待てるから、いいよ」と娘の一言。「今日初めて会った人の家に1人で自分と離れていられる娘のたくましさに驚いたとともに、その場所を受け入れているのだと感じました」。翌日、自転車で小学校や神社、周辺を散策しながら娘と話をした。「彼女が1

人の人間として嫌だと言つたら受け入れようがないですが、新しい生活に踏み出そうとする私に娘と一緒に手をつないでくれた。それでこれはいけるなと思つたんです」。

岡山は移住したい県、住みたい県としても全国でも人気が高い。「田舎だともそ者を拒む雰囲気があるけれど、岡山は、『来たいのなら来ればいいんじゃないの』と自然に受け入れる雰囲気がある。これからは東京のような消費地だけでなく、地方の生産地が強くなればいいなと思っけているので、そのお手伝いもできれば」と避難生活ではなく、腰を据えて暮らしてみたいと考えている。

誇りを持って生きる

最近、2人で出かけると、小さなキャリアカードを娘が押し、菅野さんが荷物で手一杯な時には慣れた手つきでICカードをかざす。バスに乗り遅れそうになると「バス、待って」とバスまで走る。保育園に迎えに行けば「今日は会議あるの？」

と聞いてくる。福島に住む家族に会いたい気持ち、会えない寂しさを素直に口にしながらも、「また、ばあちゃんたちとハワイアンズで会いたいね。今度は東京の友だちも一緒に行きたいね」と笑顔で話す。半月を見上げて「東京と福島で半分このお月様だよ」。大切な家族が住む、ふるさと福島をその小さな胸にしっかりと刻みながら娘は成長している。

4月から岡山での生活がスタートするが、菅野さんは、しばらくは無職で、できれば在宅でのんびりしながら仕事ができればいいかと考えている。

「シングルマザーに、はい、どうぞと言って家を貸してくれるところは、ほとんどありません。子どもにとって必要なものは、安心して夜眠れるスペースと、家族で食卓を囲んで団欒ができること。この2つが子どもにとって最低限必要なものだと思います。避難生活には、そ

れがややふやだった。このご飯おいしいねと2人で笑ってご飯を食べる暮らし、安心して明日も楽しみだねと言ってゆっくりお布団に入る暮らし、この2つが揃ってれば、子どもは集中力をもって学ばし遊ぶ。そこだけは絶対に大事にしたい」。避難生活で家が見つからなかったり、経済的に苦しい経験をして、子どもはその場所ですぐに成長していく。だからこそ、落ち着いた時間を過ごせる環境を優先したい気持ちは譲れない。

福島に戻る友人たちを見て、福島に戻ることを考えてみたが、「人の顔色を見たり、いろいろな考え方や状況の違いを考えてしまつて、自分のことを何も話せなくなる気がする。避難できなかったママたちのことを思うと何も言えない。東京に避難して、ボランティアや社会的な活動に初めて携わったけれど、福島に帰ったら同じような活動は難しいだ

ろうな」と感じてしまう。

振り返ってみると、「なぜ、原発事故が福島だったんだろう？なぜ自分福島で生まれ、福島で子育てをしていたんだろう？」という疑問でいっぱいになる。それでも、菅野さんは、「これから娘とともに誇りを持って生きていきたい。そのためには自分たちが心も体も健康で、おじいちゃん、おばあちゃん、大好きだよ、とちゃんと伝えられる気持ちをしつかりもって前を向いて進みたい。いろいろ苦しい経験をしたので、何があっても大体のことは平気。自分が大事にしたいことを信じて、誇りに思える人生を送りたい」。

様々な苦勞を乗り越えたからこそ、大事なことが見えてくる。自ら行動し決断しながら、いろいろな応援や支援を味方につけて、信じる道を歩んでいってほしい。

【インタビュー】

自分の意志に 向きあい 東京から福島に戻る

福島避難母子の会 in 関東事務局 軒澤沙織さん

福島から出る決意

「3月11日、いつもなら20分の娘の保育園のお迎えが、震災直後、停電で信号機は消え、車の事故と渋滞で2時間もかかりました。家に帰っても停電でテレビも視られず、近くの実家にたどり着いて初めてテレビを見て、地震で津波が起きていること

を知りました」。

翌日12日、自宅で割れた窓ガラスや屋根から落ちた瓦の片付けをし、その夜、やっと通じた携帯電話に友人からかかってきた電話が「もう、福島終わりだと思う」。「最初、は？」と思っただけれど、ネットで調べると、原発事故の深刻な状況が次々と流れていて専門家たちが「逃げろ！」

と言っているのを見て眠ることもできませんでした」。

13日、枝野官房長官がテレビでは「大丈夫です」と連呼しているのに、ネットには恐ろしい情報が流れていて、「もう、これは自分で調べて、自分で判断しろということなんだ……」と思った矢先の14日、福島第1原発第3原子炉が爆発。夫に「娘と福島を出ます」と宣言し、持っているだけのおもちゃや生活用品を車に積み、4歳の娘を外気に触れさせないようにタオルでぐるぐる巻にしてかっぱを着せ、ビニールを頭からかぶせ、傘をさしてでかける準備。「放射能の外気に触れるだけで、眼や耳、肌から血が吹き出すような恐ろしいイメージを抱いていました。それほどの未知の恐怖でした」。同居している祖父母が、「どこに行くの？」「放射能が危ないから逃げます。窓は開けないで！換気扇は回しちゃダメよ。外には出ないでね！」と慌ただしく伝えると、夫も一緒に行くというので3人で車に乗り込んで夫の実家のある会津に向

かった。

「80歳を超える祖父母とは今生の別れ、2人を置いていく罪悪感はあるで犯罪者のような気分でした」。

会津若松に向かう途中、極寒のなか、エアコンを入れると外気が入ってきて、放射能にやられると思い、エアコンもつけず震えながら車で走った。郡山を抜ける直前のコンビニでは空っぽの棚、トイレ渋滞。会津若松に着てもガソリンスタンドの渋滞。「割り込んだ車に刃物を持ち出す人もいて、みんな必死。警察官が常駐しているスタンドもありました」。

山梨で

3人で会津の実家で2週間くらい過ごしたが、会津でさえ放射線量が通常の10倍になった。「もう家に帰るのは嫌だ」と思い、3月末に住むところを探し始めた。その頃、自主避難を受け入れていたのは東京、北海道、沖縄くらいで、募集の話を聞いてHPを見ても締め切られていたが、山梨で被災地の子どもたちを受

け入れている清水国明氏が運営する『森と湖の楽園』を知り、娘と2人で山梨へ。行く途中に通った東京が普通なのを見て、「福島は、やっぱりおかしかったんだ！」と気持ちが解放された。

山梨では福島や宮城の子どもたちがたくさんいた。子どもたちだけの避難というのも多かった。「子ども100人近くが、入れ替わり立ち替わり、親も迎えにくるし、人手が足りず、子ども部屋を掃除したりご飯つくったり、すごく忙しかった。それで気が紛れたのもありましたね。私自身、子どもたちが遊んだり、笑ったりした姿を見て、すごくホッとした。それまでは、友達と電話して、『福島から出られないの？』『牛乳飲んじゃった』とかいいながら毎晩、泣いて暮らしてましたから」。ここで伸び伸び暮らして気持ちが切り替わった。

落ち着かない避難生活

その後、4月11日に綾瀬市の東京

ところ、ようやく「東京都内、無料で貸します」という情報をネットの住宅マッチングサイトで見つけて即、応募したところ運良く住むことができた。郡山を出てホテルや避難所へカ所を転々とし、そこに落ち着いたのは5月中旬だった。

それぞれに、ゆれる悩み

軒澤さんは、引越先の世田谷で、同じ福島から母子避難していた人に出会い、7月、『福島避難母子の会 in 関東』の事務局スタッフとなった。震災から1年後の2012年3月には、品川に事務所を借り、自主避難した人たちが自らを語るイベントや弁護士による無料相談、ものづくり体験などのワークショップなどを開催し、情報交換や交流を深めている。

「避難当初、不安で泣き暮らしていたママたちが、震災から1年が過ぎると、パートや習い事を始めたりママ友とランチしたり、都会で順応していく姿はすごいねとお互い話して

いました。2年もたつと、かなり意識の差がでてきました。母子共に東京での暮らしに慣れ、避難者や被災者と呼ばれるのに抵抗がある人もいれば、戻るかどうか悩みながらパパと電話しては泣いて暮らしている人もいます。避難母子の会を運営しているのは前向きな人たちで、次のステップのための情報交換や交流をしようとするんですが、泣いて暮らしている人の話を聞くと、どう運営すればいいか、正直つらい部分もあります。同じ避難者として、どのように運営するのがいいのか、迷いはずっとありますね」。

戻るか、戻らないか

避難生活を余儀なくされている福島県民は、15万人超。そのうち県外避難は6万人。山形が最も多く13000人、次に東京の7400人、新潟6700人（2011年11月30日時点）と続いている。2年たった今も全体の15万人はほとんど

武道館に移った。天井の高い体育館にパーテーションとダンボールで自分の寝る場所を作る。すぐに閉鎖になることを知り、2泊後赤坂プリンスホテルの避難所に移った。多い時で約800人が暮らしていた。

「福島県の人は、会津や浜の方など地域によって全然気質が違う。4月中旬頃から賠償の支払いが始まり、補償や状況の違いで皆話しづらくなっていきました。警戒区域の人は都営住宅などに決まっていくなかで、私たちのような自主避難者たちは、ほとんど居づらくなくて。自主避難者には住宅提供がなかったのでも、応募もできなかった。友達もできないし落ち込む一方だし、自分からしゃべる気にもなりませんでした」。

ただ、娘は移動するたびに「ママ、今日は、どこに泊まるの？」赤プリでは、「ホテル、すごい！ホテル、大好き」。赤プリでの1ヶ月間は、子どもの無邪気さに救われた。

赤坂プリンスは6月末に閉鎖が決まっていたため、必死で家を探した

減っておらず、山形が9513人、東京7449人、新潟5724人（2013年2月12日時点）。

福島から約1時間で行けるため、福島に隣接した山形や新潟に避難した人は多く、福島に父親を残した母子避難も多い。

「車で避難しているから、会おうと思えばすぐに会いにいける。地方避難の人たちは、会おうと『いつ帰る？』と帰る機会をうかがっていたり、毎晩泣いてパパに電話していたり。簡単に会える距離というのは、お互いに気遣い合えずで、自立しにくいのかもしれません。都会避難の人はほとんど前進して、すでに子どもたちの塾や中学受験のことまで考えている人もいます。都会避難者と地方避難者の時間軸の捉え方の違いを感じますね」。

この春には、山形に避難した1万人のうち2000人ぐらい、新潟の6000人のうち1000人は福島に戻るのではないかとされている。「子どもを学校の途中で転校させたくないの、幼稚園、小、

中、高に入学する切り替えの3月に戻る人が多いようです。実際2年と1年のはターニングポイントで、最初から2年の約束で出てきている人も多いですし、家族が離れているのも限界。これ以上離れていると離婚を迫られる人もいる。避難生活を続けるか、帰るか、避難生活をあと1年にするのか、2年にするのか、子どもが卒業するまでにするのか、メドをつけた人が増えたような気がします。福島から1時間で行き来しやすい距離というのは、福島の実況も入ってきやすいので、怖いと思いつつ『みんな、住んでるし、もう、大丈夫じゃない?』という感じ。でもそのほとんどは、経済的な限界が来て戻る人たちなんです。

県内避難、いわき市では

福島の県内避難者といっても、各地域で様相が全く違う。なかでも、いわき市は、警戒区域からの避難者2万3000人を含む、3万人以上の避難者を受け入れており、

36箇所建てられた仮設住宅には7500人が住む。不動産屋は、避難者優先に物件を貸すため、一般人は後回し、アパートの新築工事が始まると、すぐに埋まるほど物件がない。元々、何かあると郡山の病院にヘリコプターで運ぶほど病院が少なかったため、人口が増えて医療機関が足りず、待ち時間も増え、医療が不十分になっている。

いわき市の学童保育や保育園の数は少なく、元々待機児童が多かった。震災後も地震が頻繁に起こり、子どもだけで家におけないということも、学童保育の入所希望者が急増した。「避難所の子どもたちが無料で優先的に入所できるため、地元で以前から待機している人たちからは、不満の声があがっています。学童保育は郡山市では市営ですが、いわき市では公設民営。職員の志は高いけれど給料が安くて、後輩が育たない。いまだに地震があると、子どもたちは、パニックになる子もいるんです。職員も対応しきれいていません。保育所や学童保育の不足は深刻で

すが、警戒区域が解除されたら避難者はいずれ戻るから、市としては新たに造ったら無駄になるといつて造ろうとしないんです」。

警戒解除になった避難者は帰ってよいのだが、役場機能をいわき市に移し、商店も病院もないところに戻っても生活できないため戻ろうとしない人も多い。「地元には元々高校がなく、郡山や隣町に出ていくような地域ですから、一旦いわき市に来たら、なぜ、わざわざ不便なところに戻らないといけないの?と。元々、父親がいわきに勤めていた人たちが、住宅を用意され生活費も助成され、子どもたちは学校も近い、コンビニもゲーセンもマクドナルドもあるとなると、戻ろうとはしません。以前、三宅島噴火の全島避難で、東京のなんでもある状態に子どもや若い人たちが慣れてしまい、帰らなくなってしまう例がありますが、それと同じですね」。

生活は楽になった人もいるかもしれない。しかし、将来設計が見えず不安な人は少なくない。

福島に帰りたい

軒澤さんは、二度と帰らないと覚悟して東京に避難してきたのに、いつからか福島に帰りたい思いに駆られていた。

「同じ被災者や支援者の人にあつて辛くて……帰りたくてしようがなかった。『ふくしま』という言葉のイメージが、すでに放射能汚染されてしまった土地になればなるほどすごく辛かった」。

官邸前のデモにも参加したが、「フクシマを帰せー!」と叫ぶ人たちに對して、「誰に何を返せと言っているんだろ。ぼかーん、という感じでしたね」。

2012年夏、東京で契約社員として働いていた夫の契約が切れ、再就職先を探したが見つからない。「避難した直後2011年5月にハローワークに行くと、被災者向け求人があるようにあり、ハローワークにいった1週間後には働き出していたのに。でも、福島の人を採用して

も、『この人はいつか福島に戻るんだろうな』という雇用主の気持ちもわかるんです」。

東京で正社員になると簡単に辞められず、福島に帰るタイミングがつかめなくなる。このまま東京で親子3人で暮らすイメージもわからない。そこで、夫が福島で仕事を探す選択もあると考えた。探し始めるとすぐに見つかった。

「夫といつまでバラバラに暮らすんだらう、別に福島でも娘と一緒に住める場所があればいいなと思つていたところ、郡山市の隣町が非常に線量が低く、0.05μSv/hくらいしかなく、東京よりも線量が低いかもしれない場所だとわかつたんです。福島でも生活の意識が高い若い人たちが移住をしてくいて、ここなら住めるなと思つきました。運良くその町で物件が見つかり、近くには私立の小学校があることもわかつた。4月から娘が小学校にあがるのですが、公立小学校に通わせるなんて考えられず、学校になんて通わせなくてもいいくらいに考えていま

た。私たち母親の世代は、原子力発電所のおかげで、こんないい生活ができるかと教わつてきた。文部科学省が公立小学校で原発事故後に、どういう教育をするつもりなのか信用できないし、教員たちが本音をいえない現場で、本音と建前を使い分けながらの教育なんて娘には絶対に受けさせたくありません」。

その私立小学校は、給食はなく、親との対話を大事にし、また、原発事故後の対応も早く適切だったことを知り、この学校ならと思つて決めた。

夫の仕事、家、娘の学校、この3つがクリアできたため、福島に帰る決断に至つた。

どう生きるか

東京に避難してから様々な苦勞をしつつ軒澤さんは、知ってもらいたい、伝えたいという気持ちで、母子の会の運営や人に語つてきた。しかし、複雑な心境を抱え、答えが出ないことが多い。

「私は福島でこの子を産んでしまったことを消したい、娘が福島出身であることや4歳まで福島で過ごした記憶が消えればいいのに。なぜ、こんな不安定な生活を送って、こんな気持ちにならなくちゃいけないんだらう、と疑問に思っていました。いろいろなメディアの人に、『福島がどうなったら帰るんですか？線量がどれくらいになったら帰るんですか？具体的な数値目標があるんですか？』と言われてきましたが、そういうことではないんです」。

どこで生きるか、どういう条件があればいいのかではなく、どう生きるか、自分らしい生き方ができるかを大事にしたいだけなのだ。「不安だけれど、とりあえず見つけたところに住む、無ければ買う、また探すという、その場で最善の選択をする経験を乗り越えてきたら、もうなんでも来いですね。それに、助けの声をあげると誰かが助けてくれることもわかった。でも、声をあげられる人ばかりではなく、前に進むようとしている人もいれば、離婚調停をしながら泣いて暮らしている人、いろいろな問題でがんばっています。避難者同士でもそれぞれの

立場や考え方の違いで、つながるのが難しいので、支援者の人たちはもつと難しいと思う。でも、複雑な思いを抱えながら助けが必要な人がいることだけは絶対に忘れないでほしい。そして、一度あげた支援の手を下ろさないでほしい」。

◆福島母子支援の会 in 関東
<http://hinaboshi.blog.fc2.com/>

【インタビュー】

それぞれの避難状況にあわせた支援を

福島県自主避難・母子避難新潟市自治連絡協議会 会長
特定非営利活動法人 新潟NPO協会 代表
福島大学行政政策学類非常勤講師
村上岳志さん

新潟への避難

村上さんは、3・11当日、福島市内にいた。「地震の被害は、古い家の壁や屋根が落ちた程度で、宮城のほうが目撃という印象でしたが、翌日、都内に勤める友人から『原発がダメだ。できるだけ西に逃げたほうがいい』と連絡が入ったん

です」。高速道路が寸断されていたため、山形経由で西へ避難する途中の車内のテレビからは「福島原発1号機に爆発的現象が発生した」という報道が流れ、1号機から白煙があがった映像が流れてきた。「これは、もうダメだ」と感じ、いざというときは中国のハルビンやロシアのハバロフスクに海路で行ける新潟に行く

ことを決めた。

避難した新潟県西蒲原郡にある弥彦村の避難所は最高でも70名くらいの小規模避難所で、温泉が併設されている高齢者施設だったため、10畳間に2、3家族ずつが入り、温かい布団で毎日温泉に入れる生活だった。そこには、南相馬市から来た子ども連れ家族が多かった。

その避難所での半年間を避難所代表として過ごし、新潟市に移ってからは、NPO法人新潟NPO協会避難者支援事業統括に就任し、「新潟市震災避難者交流施設ふりっぷはうす」を運営。また、福島県自主避難・母子避難新潟市自治連絡協議会の会長に就任し、「NPO法人FLIP」を立ち上げ、避難者・支援者の両代表として避難者支援事業を県や市と協働で行なっている。

新潟への避難者、6000人

福島県民200万人のうち、県外避難（広域避難）者は、全体の3%

にあたる、約6万人。その1割の約6000人が新潟県に避難しており、そのうち1000人が、0歳〜18歳までの子どもである。

「福島から新潟県への避難者は、自主避難と強制避難の人が、ちょうど1対1の割合です。強制避難の半数は、柏崎市に集中しており、他の地域は自主避難の人の数が上回っているか同じくらいですね」。

村上さんが現在生活している新潟市には、福島から新潟県への避難者の約4割にあたる、25000人が避難している。20000人が自主避難、警戒区域からの避難が5000人で4対1の割合である。

自主避難した母子たち

新潟への自主避難世帯の大半は、仕事を持つ夫を福島に残したまま、母子のみで避難している母子避難世帯である。

村上さんの調査によると、「平均2人の子どもを抱え、母1人+子ども2人の3人で避難生活を送っている

人が大半で、母子避難世帯の末子の平均年齢を調べると3歳が多い。つまり、事故発生当時、2歳の未就園児を抱えていた家庭が多数を占めているということだ。これは、一番下の子の幼稚園や保育園がなかったから動きやすかったということでしょう」。福島県内の幼稚園や小学校へ入園入学させたくないという母親が移動してきており、一方で、通学する子を持つ親は、それが足枷になって避難できなかったという人も多かった。

「性別では、末子10000人を見たとき、女の子の比率が62%でした。女の子には、将来の出産のリスクがあり、特に、結婚するときの差別を親が意識したからでしょう。ある0歳児を連れて避難してきた家族は、『我が子には、福島にいたことは、絶対に伝えない。新潟で生まれ育った子だと教える』という人もいました」。

思春期の子どもの不安も大きい。「言葉には表さないけれど、ものすごく不安を持っています。『自分は

春期にさしかかってきた女の子には配慮していて、『こつちに来て良かったね』というところで止めていて、『実はその前に数ヶ月間被曝していた』ということには触れません」。

母親は、子どものためを思い、最悪の事態やリスクを考えていて楽観はあまりしない傾向がある。「ことさら危険なケースばかり考えて病んでしまうのもよくないし、逆に楽観しすぎて何もしないというのも、もしものことを考えたらいいことではない。もやもやするけれど、今は、推移を見守っていくしかない状況です」。

子どもと母親は写し鏡で、子どもの様子を見ると、母親の状況もわかっている人といっていない人の個人差が出てきています。避難したママ友のなかで、大変だ、大変だというわりには、お子さんが元気な様子を見ると、周りのママたちに話をあわせていて、新潟に根を張っても大丈夫だなという人もいれば、何も言わずにいる母親のお子さんをよく見てみる

と、帰りたい、帰りたい、でご主人と夜な夜な電話して泣いているんだな、といったことが、お子さんを通して透けて見えてくるんです」。

ただ、震災から2年がたとうとする現在、いい意味でも悪い意味でも、みんなが無関心になってきたことで、母親たちの気持ちも落ち着いてきたようだ。

「以前は新潟の人に『避難してきて大変ですね』といわれることで、福島のようなイメージを背負ったり構えたりしていましたが、最近は、避難者だとわかってても、『あ、そうなんだ』で終わり。新潟市は、転勤族の奥様が多いので、そのなかのひとつの要素になってしまっていることもあり、抵抗が薄れてきているようです」。

戻るか、戻らないか

避難者の今後の選択としては、『福島に戻る』『避難継続』『新潟に定住』の3つがある。

まず、『福島に戻る』選択をする

将来ちゃんと子どもを産めるのだからか」と心配をしていますし、風邪の症状や成長痛で身体が痛いという一般的な状態が、すべて放射能と結びついてしまい、ものすごい恐怖が襲ってくるようです。これは、親の不安の影響もあるのですが、福島に残っている人よりも恐怖が増幅されている部分があるなと感じます」。

母と子は写し鏡

福島から避難してきた子どもたちは、放射能を意識していない子がほとんど。津波や地震のような大きな被害を実際に見たわけではなく、目に見えず、臭いもしない放射能を自覚できるわけではないため、単なる引越して父親がいない状況、単身赴任の逆になっただけという印象なのだという。そのため、自主避難者の子どもたちの心情は、母親の心情を写しており、母親に大きく左右される。

「母親は、小さい子にはあえて避難の詳細は言わないし、10才以上の思

人は、今の福島が安全だとは思わないうが、避難生活による経済的負担が限界という人である。借り上げ住宅には、2013年度末まで住めることになっているが、家賃補助は6万円まで。車が必要なので駐車場代、食費、子どもの教育費などで、月7万円くらいの家計負担増、福島の家での生活費に加えて年間100万円以上の出費増がある。住宅ローンがあっても全く減免はされず、父親まで避難して新潟に住民票を移すと、住宅ローンの利率が変わったり減税対象外になり税金が高くなったりして返済額が上がるため、売却することもできないのだという。「自主避難の方はお子さんがいるので、幼稚園、学校の切り替えにあわせて、2月3月の時期にまとまって帰る人が多い。先行して年末に戻ってならす人もいます」。

また、福島に残るご主人や家族との関係が悪くなって、このままだと離婚しかねないという人や、お子さんが新潟の暮らしになじめない場合もある。「戻る」というより、追

詰められて『戻らざるをえなくなつた』という人が多い。逆をいえば、支援者側が十分なことができなかったということであり、支援者として聞かされた胸が痛みます」。

今の福島は安全だとは思わないため、経済的に続けられる限りは避難し続けていたい《避難継続》の人が、新潟で一番多い。「新潟に避難された方でも、2011年の夏くらいまで福島にいた方が多いので甲狀腺検査の結果、お子さんに異常が見つかったという方もひじょうに多くいます。そんななかで、福島県は戻ってくるように呼びかけているのですが、福島には戻れない、福島の今後の状況を時間をかけて判断したいと決断を先送りする人が多いですね」。

《新潟に定住》を決める人は、若干増加傾向にある。「最近の甲狀腺検査の結果を見て『もう福島に住むのは無理』と判断する人が増えていきます。除染自体に全く効果がないという報道がありました。福島の人にとっては随分前から当たり前になっていて、除染なんて意味がない、お

金を回すための政府がやっているポーズでしか無いと言っている人が多いようです。3歳の子どもが高校卒業するまでの十数年を超長期避難し、その後、福島の夫を呼び寄せ、夫婦で新潟に定住したいという人も少なからずいる。

「この3つのグループは、常に揺れ動いていて、時期によって比率は変わりますが、大体、『福島に戻る』が25%、《避難継続》が40%、《新潟定住》35%弱の割合です」。

警戒区域からの避難者

強制避難で柏崎に避難した人たちは、東電関係の転勤扱いや柏崎で仕事をしたことのある人が多く、補償も進み、衣食住はほぼ足りている状態で、生活は安定し始めている。

「1人あたり、月10万円の補助金があり、世帯収入が被災前より倍以上の不労所得があるので、仕事しなくてもやっていける。大人たちは仕事をせず、意欲がなく、やることもなく、いきがないので、カルチャー

センターのような支援が欲しいなど比較的贅沢な悩みをいう。パチンコに行き、夜はスナック通い。大人が集まれば、賠償金を取る相談。そういう大人たちを見ている子どもたちがイライラし、鬱憤をどうしているかわからず、問題行動に走りやすい傾向があります。特に、小学校高学年、中学生が心配です。また、もう少し下の年齢の子だと、毎月デイズニード通いといった、思いっきり甘やかしている家庭もある。自分の家に帰れない苦悩があるとはいえず、子どもたちにとっては、いい環境とはいえません」。

避難生活という意味では、強制避難も自主避難も同じように見えるが、「自主避難の人は、子どものことを考えて、家族と離れて苦労することや同郷からの同調圧力にあがなって生きる覚悟をした避難。警戒区域からの避難者よりは、子どもにとつていい環境をつくろうと頑張っている人が多いのではないかと村上さんはいう。

福島に残った人たち

村上さんは、福島大学の非常勤講師として定期的に福島に戻り、福島にいる人たちとも交流がある。福島で複数の人がいる時に話を聴くと「怖いけど、なんとか頑張っている」と思います」と答える人がほとんど。しかし、個別に聴くと「本当は逃げたいけれど、逃げられない。みんなには内緒だけど」という人が多い。

「やはり、逃げたほうがいいのかな？」と相談されることもあるのですが、『自分で決めて』としかいえません」。

福島市の公式データ(2011年6月)だと、4割の人が逃げたいと思っており、20代・30代では逃げたい人は6割。福島の人で、福島県産のものを食べたくない人は6割を超えている。(2011年12月のデータ)

「福島では、集団での聞き取り調査はできません。個別でない、本音を言わない。なかには、『もう1回何かあれば、俺、逃げれるのになあ』

という中高生もいます。親が福島に残ることを決めると、子どもには選択権はないので、その子たちにかかる言葉が見つかりません」。

『母子支援』の必要性

新潟で以前から活動している支援団体はあっても、避難者のニーズにあつた支援は、まだまだ十分ではない。

「支援団体としては、被災者支援としたほうが助成金をとりやすい。元々未就学児の支援団体が、被災者支援の助成を受けて子育て支援活動をする、実際には小中学生は全く恩恵を受けてないにも関わらず、その地域での子育て支援は充実していることになってしまふ。また、子どもたちのみの支援は多いが、母親への支援がない。避難した孤立しがちな母親は、一般的な子育て相談も入手しづらい地域があります。避難者の多くが母子避難なのに、『母子支援』の発想が欠けています」。

福島からの原発被災による避難は、今までにない状況を作り出して

いる。そのため、支援する側が避難した被災者の生活状態や心情をよく理解してニーズを把握しない限り、的を得た支援にはならない。

「自分が、被災当事者なので、最低限の生活水準まで支援すれば終わりという立場ではなく、落ち込んだギャップを回復し、震災前の生活に戻れるような支援が必要だと考えています」。

新潟に初期に自主避難した人たちは、福島でも年収600万円以上、比較的富裕層の方たちですが、昨年は、家賃や生活用品の補助を目標に避難して来た人たちが増えていきます。元々の生活の違いがある人たちが避難してきたからといって、必要な支援は同じではありません。それぞれの人が困っていることを少しずつ解決して、本人の普通の生活水準に戻すというのが、今回の支援の一番のテーマだと思います」。

◆福島県自主避難・母子避難
新潟市自治連絡協議会
<http://fjb0311.blog.fc2.com/>

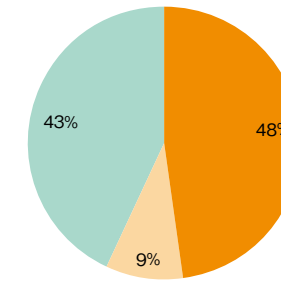
東日本大震災による 子どもたちの学習環境の 変化と影響についての アンケート

一般(回答者数 47人)

被災三県と避難されている方にアンケートを実施し、47人の方から回答を頂いた。サンプル数としては少ないが、半数強が学校や校舎を変わっており、4分の3の方が現在でも子どもについての不安を抱えていることがわかる。

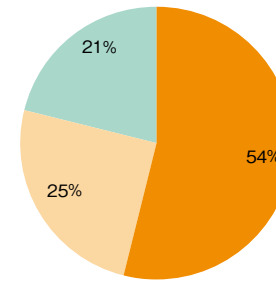
住まい		保護者年代	
岩手県	4	30代	9
宮城県仙台市	25	40代	30
いわき市	12	50代	7
福島県浪江町、須賀川町、楳葉町	各1	同居の家族の人数に変化	
東京	1	変化はない	27
震災前と震災後で世帯主のお仕事の状況		同居の家族が減った	17 (父のみ福島2)
変化はない	30	同居の家族が増えた	1
震災により失業したが現在は再就職をしている。	5	家計の変化	
震災により失業して、いまだ失業中である。	3	特に変化はない	18
その他	6	収入が減った	12
		収入が増えた	11

Q1 震災前後、学校は変わりましたか？



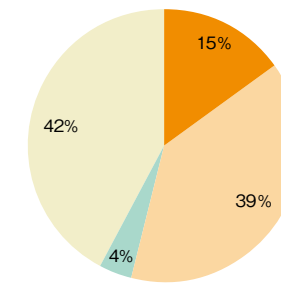
半数が震災後、学校・校舎を変わっている。

Q2 震災後、いくつ学校や校舎を変わりましたか？



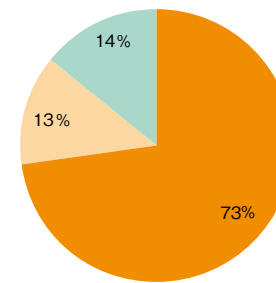
学校・校舎を変わったうちの半数が2カ所以上変わっている。

Q3 学校・校舎を変わった理由



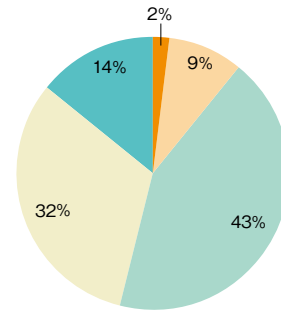
使えなくなった、自宅に住めなくなった、経済的理由、放射能からの回避

Q4 学校・校舎を変わった後の子どもの様子



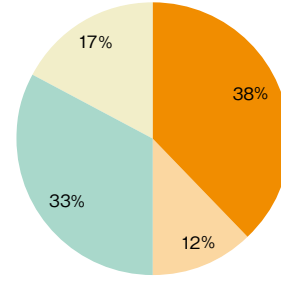
学校・校舎を変わった子どものうち、「今も不安定さが見られる」が13%、「不登校・いじめ」が14%。

Q5 震災前後の成績の変化



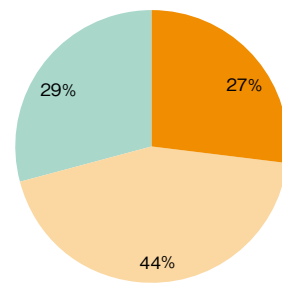
「少し下がった」「かなり下がった」を合わせると約半数。

Q7 お稽古事や塾に通っていますか？



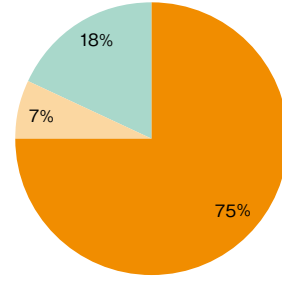
震災前も、震災後も通っていない、震災前は行っていたが、今は通っていない、震災前も、震災後も行っている、震災後にはじめた

Q6 家庭学習時間の変化



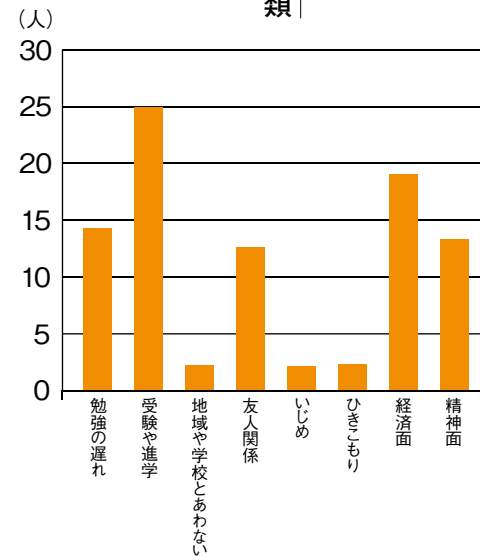
家庭学習の時間が増えた、家庭学習の時間はほとんど変わらない、家庭学習の時間が減った

Q8-1 お子様について不安はありますか？



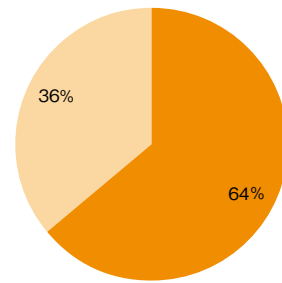
不安がある、以前は不安があったが、今は解消した、特に不安はない

Q8-2 不安の種類 (複数回答)



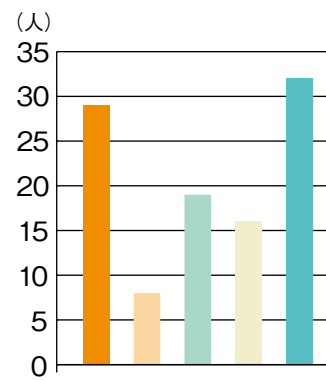
子どもについて不安は、75%が「ある」。不安の種類は、1位が「受験や進学」、2位が「経済面」、3位が「勉強の遅れ」。

Q9 その不安は、震災の影響が大きいと思えますか？



その不安は震災の影響が大きいと64%が答えている。

Q10 今後、どのような支援が必要ですか？ (複数回答)



支援については、1位「就学援助や奨学金などの経済的支援」、2位「休日や放課後の学習支援」、3位「進学相談」。

休日や放課後の学習支援、休日や放課後の遊びの支援、進学相談、カウンセラーなど専門家による精神面のケア、就学援助や奨学金などの経済的支援

その他、震災後のお子様の学力や学校生活に関わることで気になること

岩手県柴波町
お子様：公立小学校

震災後、2カ月学校に行けない時期があり、かなり勉強が遅れました。遅れた分、少しずつ分からない部分がわからないまま次に進む……という状態なので、学力は落ちていていると思います。

福島県いわき市
お子様：公立小学校

塾や勉強（自主学習）をしつかりしてないと、学校授業の内容がサラツとしているので、理解までできているのか不安になることもある。通知表もテストの結果ではなく、学校生活が普段の子どもに対しての成績なので、あてにはならない。

福島県いわき市
お子様：公立小学校

（子供よりも親が）被災者だ、という事で特別視されている（あわれまれてしまう時がある）

ます）と感じる事がありますが、皆さんとても優しく受け入れて下さっています。感謝です。

福島県いわき市
お子様：公立小学校

子どもの進路で悩んでいます。住宅問題がハッキリしないので。

宮城県仙台市
お子様：公立小学校

震災の影響を受けた子と、そうでない子との学習・生活環境の差が、同じ地域に生活しているも大きく違っていることを感じる。支援が欲しいところを欲しいだけ与えて欲しい。タダゼミでの学習は、大変有難かった。しかし、兄弟がおり、下の子が受験する時には、このような場が無い事に不安を抱えている。

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

するとフラッシュバックする。津波を実際見ていないが、津波の映像、地震の映像を見ると気がめいってくる。

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

塾などはお金が高いので、母子家庭だと通わせるのに金銭面で不利。今回タダゼミに参加させていただきとても助かりました。ありがとうございました。（感謝の気持ちでいっぱいです。）

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

震災によって学力の変動はありません。

東京都
お子様：公立中学校

学校のカウンセラーさんにお願したのですが、役に立たず……悲しかったです……メンタル・体調が報道によっても左右するので見守る体制整えてほしいです。

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

良い先生に恵まれ、楽しく学校生活が送れているようであれしく思っております。また、学力もあまりない子どもでしたが、キッズドア・タダゼミ様のおかげで、希望通り、私立2校も合格することが出来ました。ありがとうございました。来月の公立入試に向けて、本人ともども一生懸命頑張っております。あと、わずかとなりましたが、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

宮城県仙台市
お子様：公立小学校

小学校3、4年と2年間仙台市の小学校に転居し、また、5年から転居のため小学校を転校することになり、友達づくりに苦労しているようだ。2、3人の友人は出来たが、「もう転校したくない」と子供から言われた。学習面でも、塾に行かせたいが子ども3人はムリ。男の子なの

で、勉強に集中できるまで時間がかる。

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

津波被害からはかるうじて被らずに済んだが、当時、フリースクール通学だったので震災直前、河川の大橋をバスで帰路についたのだが、時折あの増水した河川にのみ込まれていたら等、うまく表現する事が出来ないうトラウマを抱えながらも復学したものの自分の立ち位置や存在価値についての不安があるのか、うまく溶け込めなかつたり、口数も力なく、必死で勉強にとりこもうとする姿勢と投げやりな態度の両極端な場面があり、学力も、がんばったイコール学力向上につながらないもどかさといらだちを抱えている。

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

お子様：公立中学校

地震の日からそのまま春休みになり、各クラスごとで授業の進み方に違いがあったため、習っていない所や途中で学年が終わってしまった、自分で勉強しなくてはならなく大変そうでした。

福島県いわき市
お子様：公立中学校

田舎と都会では学習のスピードや内容が違うので、ついていけないのがとてもかわいそうに思います。また、突然知らない土地で暮らすことになり、二人とも全てにおいて自信を持っては引越したことを後悔することもあります。

福島県いわき市
お子様：公立中学校

中学生になり自我がめざめ、友人や学校、親とうまくいかず孤立がち。

福島県いわき市
お子様：公立中学校

勉強の遅れ。

中学3年生の娘ですが、1年生の3月に震災があり、2年生になつてから、突然私の父が他界し、新学期スタートから学校を休み、その後体調を崩しては、2ヶ月に1回は、10日間ぐらゐ学校を休みがちになり、3年の中総体終了と同時に不登校になりました。現在も学校に行っていない。正直何が原因かわからず、ただ見守っている感じです。進路も大変心配です。単位制を受験はしましたが、中学浪人も覚悟しなくてはと思っています。震災後はそういう子供が増えているのでしょうか？

宮城県仙台市
お子様：公立中学校

体育館が流されて、部活ができず他の学校への送迎が大変です。

福島県浪江市
お子様：公立中学校

勉強をやる気が減少する→友達の影響が大である。震災の内容によって、様々であるが地震で言えば、かなり恐怖体験をしているため、地震が大きかったり

20人が記述した内容は、学習の遅れ、進路の問題、不登校、精神的な不安定さなどをあげ、支援の必要性を感じさせるとともに、支援がいつまで続くかの不安も書かれている。

おわりに

震災から2年が経過し、子どもたちはどのような状況になっているのかを知るために、昨年10月からインタビュー先をあたり始めました。その頃、自治体や大学関係の調査がたくさん入っており、被災者や子どもに関わる方たちが調査疲れをしていることをあちこちからうかがいました。調査で余計な無理をさせるのは今回の目的に反すると思い、無理をせずお話ししてくださる方をじっくりと探しました。

子どもといっても、未就学児から小学生・中学生・高校生まで、それぞれの年齢で抱える問題は違います。また、津波被害の町に住んでいた子どもと、福島の子どもたちでは抱える問題が違うように、地域による違いやその後の暮らし方によって、家、家族、学校、子育て、学習、仕事、経済問題、健康……などの要素が複雑に絡み合っていて、少しうかがうだけでは本音まで理解できず、一人ひとりじっくりとお話をうかがう時間をいただきました。

たとえ元気に学校に通っている子どもでも、同じ地域の被災者同士でも、時間が経つに連れて震災については話せない、話しづらい状況がわかりました。母親は、子どもにとってベストを尽くそうと考え

て行動しても、途中で起こるさまざまな問題において子どもの不安な様子を見ると、自分の選択が間違っていたのではないかと常に悩みます。被災により家族や家をなくし、子どもをケアしないといけないとわかっていても、母親自身も深く傷つき、子どもとの接し方で自己嫌悪に陥り、その罪悪感でさらに追い詰められていることもわかりました。また、震災後の混乱、住む場所、保育園や学校、仕事、助成などの手続きといったさまざまな決断の連続の避難生活の困難のなかで、親自身も明日の暮らしのことで精一杯で、子どもたちを気遣うことができなかった人も少なくありませんでした。

声をあげられない子どもたちに、必要な支援の継続を

今回お話しくださった方たちは、大変な渦中にいながらも何らかの支援につながり、前を向いてしっかりと歩もうとしている方ばかりです。今までのつらい経験や気持ちを整理したいと話してくださいました方もいます。快くお話ししてください、本当に感謝

しています。

しかし、こうやってお話ができる状態の方は、少数だと思えます。震災の影響で傷つき、未だに解決できない問題をいくつも抱えながら、話さえできない方、安心して話す相手さえ見つけられない方は、まだまだたくさんいるのではないのでしょうか。

また、親を亡くし遠い地の親戚の家にいる子どもたちや、津波で家をなくし全く新しい土地での暮らしをスタートさせている人は、周りに同じ経験をした人がおらず孤立しがちです。震災後に親が離婚し、被災者としての支援を受けられない子どもたちもいるかもしれません。また、直接の被災はなくても、震災によって親の仕事に影響がでて経済的に困窮し、進学や将来をあきらめないといけない子どももいるかもしれません。震災の影響を受けた子どもたちは、全国にたくさんいるのではないのでしょうか。

今回の9つのインタビューとアンケート調査は、震災による影響を受けた子どもたちを知る、ほんの一例でしかありません。その背景には何倍もの子どもたちが、不安や悩みを抱えながら過ごしていることを忘れてはならないと思います。

津波による被害を受けた町が、町として機能するまで10年以上はかかるでしょう。町や家を持てるようになって、人が心を取り戻せるまでには何十年

かかるかわかりません。

混乱や混沌のなかでも子どもたちは確実に成長していきます。震災による影響が、子どもたちの将来に少しでも影を落とさないためには、子どもたちに寄り添う支援が必要です。どんな小さな支援でも、必要とされる支援であれば継続することで子どもたちを支えることができます。

震災から年数がたつにつれて、震災の影響が見えづらくなってきました。特に被災した人は、今までにたくさんさんの支援を受け、まだまだ困っているにも関わらず、「支援が欲しいというのはワガママじゃないか」と声をあげようとしない人が少なくありません。子どもたちを支えると同時に、子どもを持つ親たちを支えることも大切です。子どもたちが希望を持って前に進むために、必要な支援が届くような活動を続けていきたいと思っています。

特定非営利活動法人キッズドア
プロジェクト・コーディネーター 岡本美架